

報告書

シンポジウム

福島原発の

収束・廃炉を考える

～ 私たちに何ができるか～

日時 9月27日(土) 開場午後1時 開会午後1時30分
場所 早稲田大学 早稲田キャンパス15号館



シンガーソングライター
えりのあ



ジャーナリスト
岸井 成格



福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント
増田 尚宏



NPO 法人神田雑学大学理事長
吉田 悦花
(ファシリテーター)



公益社団法人 福島原発行動隊理事
岡本 達思



株式会社東北エンタープライズ会長
名嘉 幸照



元政府事故調委員・九州大学教授
吉岡 斉



公益社団法人 **福島原発行動隊**
Skilled Veterans Corps for Fukushima

最悪のことはまだ起きる。我々が、最悪の事態だと言っている間は最悪ではない。

シェークスピアの悲劇『リア王』のセリフです。

2011年3月11日、未曾有の大震災と大津波がこの国を襲い、それに続いて、私達がこれまでに経験したことのない規模の原子力事故が起きました。冷却できなくなった原子炉の状態を想像し、次々に吹き飛ぶ原子炉建屋を見て、この国の終焉を想った人は少なくなかったでしょう。

そんなとき、福島第一原発の暴発を阻止するための収束作業に、比較的被ばくの害が少ないシニアの結集を呼びかけている人がいたのです。

福島原発行動隊初代理事長・山田恭暉さんでした。退役したシニアの技術者・技能者が現場に赴き、長年培った経験と能力を活用して収束作業を担おうという山田さんの呼びかけに、2,300余りの人々が賛同して集まりました。

結集した人々は、その経歴も原発に対する立場や信条や心情も同じではありませんでしたが、「まず、俺たちで眼の前の火を消そう」というただ一点で合意し、結集した同志たちでした。やがてそれは「福島原発行動隊」という組織となり、政府や政治家や行政組織や東京電力に対して再三にわたって、事故収束作業への参画を働きかけました。

しかし、3年以上経ってもその目的が叶わない現実があります。しかも現在は、事故が起こった時、私たちが「眼の前の火」だと思った以外にも多くの「火種」が存在しているのです。

私たち「福島原発行動隊」は、いまこそ創立主旨に鑑み、現在の状況を踏まえた上で、あらためて「私たちに何ができるか」を考えるためのシンポジウムを企画しました。

この機会が、我々「福島原発行動隊」の進むべき方向と、私たち一人ひとりの行動のヒントになれば幸いです。

パネリスト (50音順)



シンガーソングライター

えりのあ

福島県双葉町生まれ。社会福祉士、介護福祉士。NHK 首都圏ネットワークシリーズ「支え合う」で特集。テレビ朝日やじうまテレビで「手を取り合って」が取り上げられる



ジャーナリスト

岸井 成格

毎日新聞特別編集委員。21世紀臨調運営委員等も務める。85年に論説委員、その後政治部長、編集局次長、論説委員長を歴任。TBS系「サンデーモーニング」「ニュース23」などにも出演



福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント

増田 尚宏

1982年東京電力株式会社入社。東日本大震災時には福島第二原子力発電所長。常務執行役 福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント兼廃炉・汚染水対策最高責任者



NPO 法人神田雑学大学理事長

吉田 悦花 (ファシリテーター)

平和に生きる権利の確立をめざす懇談会会員。毎週金曜日に開催している神田雑学大学の定例講座は15年700回を超える。テレビ・ラジオのコメンテーターもつとめる



公益社団法人 福島原発行動隊理事

岡本 達思

広報、マーケティング、CSR、企業戦略等の業務経験を生かし、社会貢献活動のコンサルティングに従事。パレスチナの子どもの里親運動代表理事ほか、複数のNPO活動に参画



株式会社東北エンタープライズ会長

名嘉 幸照

沖縄県伊是名村生まれ。GE技術者として福島に移り住み、福島第一原発の運転スタートから携わる。同原発の現場を知る数少ない技術者の一人



元政府事故調委員・九州大学教授

吉岡 斉

九州大学教授。元政府事故調委員。原子力・エネルギー関係の政府審議会委員を18年にわたり歴任。現代科学技術史および科学技術政策を専攻

シンポジウム概要

福島原発の収束・廃炉を考える

～私たちに何ができるか～

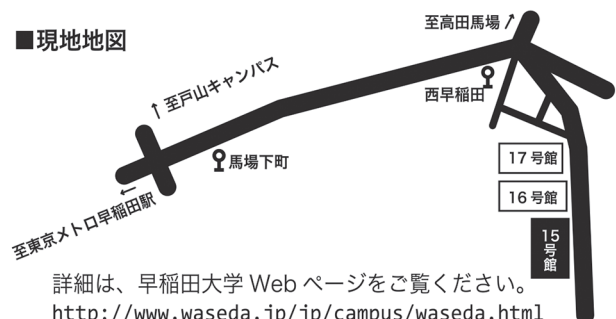
日時：9月27日(土) 開場 13:00 開会 13:30

場所：東京都新宿区 早稲田大学 早稲田キャンパス 15号館

資料代：1,000円

当日は建物入口に案内のスタッフがいますので、会場の部屋等を確認して下さい。

■現地地図



詳細は、早稲田大学 Web ページをご覧ください。
<http://www.waseda.jp/jp/campus/waseda.html>



公益社団法人 福島原発行動隊
Skilled Veterans Corps for Fukushima

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 2-2-5 共同通信会館 2 階 エコホールディングス(株)内
電話 03-6441-2572 ファクス 03-6441-2573 URL <http://svcf.jp/>

●スタッフ・協力者 (50音順)

伊藤邦夫、家森健、牛島千寿子、岡本達思、小野良一、北原慶明、五井正明、篠原浩一郎、杉山隆保、杉山百合子、高橋正明、七釜芳郎、中島賢一郎、内藤忍、野田恵子、平井吉夫、平井秀和、枚田繁、藤井みゆき、三浦秀和、宮城寛明、村上由美、ヨハン、山田次郎、渡辺ひろし

目次

■表紙・表紙裏：告知ちらしより

■出席者紹介

◆シンポジウムの記録◆

パネリスト紹介と開会あいさつ	1
ファシリテーターとパネリストから一言	2
福島原発行動隊とは	4
福島第一原発の現状	7
福島原発行動隊について	8
福島第一原発で起きていること	10
OBやシニアの活用について	11
東京電力の「廃炉推進カンパニー」という社内組織	16
福島原発行動隊を含めてシニアの有効活用	18
他の被災地とは違う福島の未解決な問題	20
現場で働く人たちの被ばく管理について	21
会場からの質問に答えて	23
原発事故を契機に生じているさまざまな問題	25
東京電力社員だからこそのつらい思いも体験	28
福島の復興をどうしていくかをきちっと考えていく必要がある	30

■付録

1) 会場アンケート集計結果	35
2) 会場アンケート感想	36
3) 会場からの質問内容	37
4) 申し込みに際しての質問内容	40
5) 映像のご紹介	44

出席者 紹介

●パネリスト

えりのあ氏



シンガー・ソングライター。福島県生まれ。栃木県の大学を卒業。とちぎ未来大使として、様々なイベントに参加。作詞、作曲、振り付けもされる音楽家です。東日本大震災では、募金活動から寄付金集め、炊き出し支援などを行った

他、社会福祉士、介護福祉士の資格と経験を生かして、心のケアや被災者とのふれあいを大事に活動をされました。

岸井成格氏

毎日新聞特別編集委員。ジャーナリスト。政治部記者として、ワシントン特派員、論説委員、政治部長を歴任。その後、編集局次長、論説委員長、特別編集委員などを経て、主筆、現在は、TBSのNEWS23、サンデーモーニングのレギュラーコメンテーターとしてもご活躍です。



増田尚宏氏



福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント。東日本大震災が起きたときには、福島第二原子力発電所の所長。被災当時、福島第二原発も福島第一原発と同様、津波によって電源を喪失し、原子炉の冷却が困難な状況に陥りましたが、

所員総出で外部電源を確保し、福島第二原発事故を防がれました。

●ファシリテーター

吉田悦花氏

作家・エッセイストとして「犬や猫」「日本蕎麦」「俳句」に関する著作を多くお持ちで、NPO法人神田雑学大学の理事長でもいらっしゃいます。また、「平和に生きる権利の確立をめざす懇談会」の事務局長としても活動されています。



吉岡 斉氏



九州大学教授。今年の春まで副学長。これまでに内閣府原子力委員会専門委員、経済産業省エネルギー調査会臨時委員などを歴任、福島第一原発事故後は、政府の事故調査・検証委員会委員を務められました。専門は、現代科学技術史および科学技術政策です。

名嘉幸照氏

福島第一・第二原発をはじめとした全国原発の保守管理を専門とする株式会社東北エンタープライズの会長。原発の製造元であるゼネラル・エレクトリック社の日本人技術者として福島に赴任されました。その後退社し、現在の東北エンタープライズ社を設立後、現在に至るまで福島第一・第二原発にかかわりつづけていられます。



岡本達思氏



公益社団法人福島原発行動隊理事。いち早く行動隊の活動に参加し、行動隊の生みの親ともいえるべき初代理事長山田恭暉と共に、3週間にわたって米国各地を歴訪し、福島原発行動隊の主張をアメリカ合衆国の議会や世論に広く訴える活動をしました。「NPO 法人パレスチナの子どもの里親運動」代表。

●総合司会

青田いずみ氏

俳優・舞台コーディネーター。舞台公演のプロデュース・朗読・司会など幅広く活動されています。舞台コーディネーターとして、音楽や芸能とのコラボレーション作品多数。移動演劇「桜隊」原爆忌の会事務局も。



シンポジウム の記録

パネリス ト紹介と 開会挨拶

青田いずみ

「福島原発の収束・廃炉を考える ～私たちに何ができるか～」シンポジウムを始めさせていただきます。本日、総合司会をつとめさせていただきます、私、青田いずみと申します。最後までよろしくお願いいたします。

今日、ちょっとお天気が悪くなってきましたが、たくさんの皆様にお集まりいただきまして、何しろ北は北海道や青森の六ヶ所村、南は沖縄からいらして下さっているそうです。本当にありがとうございます。このシンポジウム、終了時間は4時半を予定しております。

それでは、パネリストの皆さんをご紹介します。向かって左から、シンガーソングライターのえりのあさんです。そしてそのお隣、毎日新聞特別編集委員でジャーナリストの岸井成格さん。次は福島第一廃炉推進カンパニープレジデントの増田尚宏さんです。お隣は九州大学教授で政府の事故調査検証委員会委員をおつとめになった吉岡斉さんです。続きまして、福島第一、第二を初めとして全国の原発の保守管理を専門とする企業、株式会社東北エンタープライズの社長、名嘉幸照さんです。そしてお隣が公益社団法人福島原発行動隊理事で行動隊員の岡本達思さんです。そして最後に本日のファシリテーターをつとめてくださいます、吉田悦花さんです。吉田さんは、NPO法人、神田雑学大学理事長でいらっしゃいます。

それではまず、主催者を代表して公益社団法人福島原発行動隊理事長の伊藤邦夫から、ご挨拶申し上げます。

伊藤邦夫

皆様、私は年寄りの暇つぶしに被ばく作業に参加しようよと呼びかけている、反原発とは関係のない呑気なおじいさんです。放射線の被ばくが避けられない、原発事故の収束作業を、年寄りを含めてみんなでわかちあうことによって、若い作業員の被ばく量を減らそうという考えで活動しています。

私の提案は、「年寄り是一回こっきり、高線量」です。一人ひとりがごく短期間だけ高い被ばく線量の元で働くことにして、働く人々を次々に交替し続けるというのが年寄りの使い方ではないかということです。

事故の収束で働く若い作業員の被ばくを減らすために私たちシニアに何ができるか、本日皆様のご提案、ご指摘をいただければ幸いです。パネリストを初め皆様に参加のお礼を申し上げますとともに、この瞬間にも被ばく環境の現場にも働いている方々に感謝の言葉を述べて、本日の開会のご挨拶とさせていただきます。

青田いずみ

ありがとうございます。それでは、シンポジウムを始めるにあたりまして、皆様にちょっとお願いがあります。パネリストの皆様へのご質問は、このパンフレットに挟んでありますピンクの質問票にお書きいただいて、休憩時に受付にお出してください。回収させていただいたご質問については、こちらでまとめてパネリストの皆様にお答えいただきます。時間の関係で、全員の方の質問をお受けできないかもしれませんが、ご了承くださいたいと思います。では、吉田さん、よろしくお願いいたします。

ファシリテーターとパネリストから一言

吉田悦花

皆さん、いまご紹介にあずかりました、吉田悦花と申します。私がなぜこの場にいるのかというところからお話ししますと、NPO 法人神田雑学大学という活動を千代田区神田で続けて 15 周年になります。毎週金曜日 18 時から水道橋で様々な雑学講座を開催しております。健康のこと、歴史のこと、経済のこと、森羅万象、いろんなことがあります、生涯学び続ける場として千代田区神田から様々な講演と受講生の研鑽の場を積んでいこうという趣旨で 15 年間続けております。

福島のことについては、個人的にも雑学大学としても関心を寄せ続けております。原発問題という講座であるとか、7 月には双葉町から福井県の方に 6,000 キロの避難をなさったというご家族の女性にもお越しいただきまして、いま双葉町で何がどうなっているのかということを率直に聞く機会も得たところであります。そして今日、福島原発の事故収束・廃炉を考えるというテーマで私もその仲間に入れていただき、質問をさせていただければというふうに思っております。

このシンポジウムを始めるにあたって、あえて申し上げたいのは、言うまでもないのですが、いまもこの時点でも、福島第一原発の作業現場では困難な作業環境の中で、懸命に働いていらっしゃる作業員の方、東京電力の社員の方々がいいらっしゃるということへの想像力を忘れてはいけないと思っております。

そこで、早速ですがパネリストの皆さんに質問をさせていただきたいと思います。今日この場でこれはなんとしても訴えていきたいということを一言、簡潔に述べていただけますでしょうか？まずは私のお隣で恐縮ですが、えりのあさんからお願いできますか。

えりのあ

こんにちはー！ 皆さんとお会いするのは今日初めてだと思いますが、私は福島県の大塚市に生まれ育ちました。今回、PHP の『ともに生きる』という本の中で、私が執筆した記事を読んでくださった福島原発行動隊の方からお声をかけても

らってこの場にいるわけなんですね。

私は原発問題の専門家ではなく、ただ父親が東電に勤めていたということで、ここにいらっしゃるパネリストの名嘉さんや増田さんとも一緒に働いていたということもあったようです。私自身は今日、栃木県那須町の方から来ました。双葉町で震災に遭いまして、いまは那須町に避難していますが、ここも風評被害とかがまだまだ残っているんです。故郷の双葉町は立ち入ることすらできないんですね。それで実際に故郷を離れて、友達もみんな仮設住宅で生活する中で、こういった思いがあるのかとか、生の声というものを多くの人に伝えたいと思っています。

先月も双葉町の伊沢町長にお会いしまして、実際にどういう形で行政と地域とを結びつけていけば良いかなというようなことを考えています。私自身はシンガー・ソングライターという、歌を作って歌ってという仕事をしているんですけども、そういう形で一人ひとり、住民一人ひとりが何をできるかということで、日々活動しています。テレビとか、新聞、ラジオなんかで発信される情報が正しいかどうかということも、鵜呑みにせずに自分自身で判断していければということで、今回皆さんとの出会いが私のまたひとつのきっかけになっていますので、どうぞよろしくお願いします。

吉田悦花

では岸井さん、お願いします。

岸井成格

はい、一言って難しいですね。ご承知の通り、新聞、テレビ、ラジオで取材報道する立場としては、やはり福島第一原発の事故収束と廃炉への道筋は、非常に関心があります。そしてまた、日本記者クラブとか外国人記者クラブに行きますと、外国人特派員から必ず「福島は大丈夫か？」ということを訊ねられます。東京五輪も控えていますし、そういう関心も非常に高いので、今日はそこから辺り現場がどうなっているのかということなども知りたいと思っています。

もうひとつ、自己紹介がてらになりますけど、私はいまの環境省の名付け親の一人でございます。これはたまたま巡り合わせなんですけど、そ

の関係でずっと植林活動のNP0の理事長をやってきました。3.11後は南相馬市で防潮堤づくりをやって、いま1万本寄付をしているところです。本来であれば、瓦礫を盛り土にした「防潮堤」にしたいのですが、なかなか土地の関係とかで難しく、「防潮林」というところから始めていますけども、そういう点でも福島第一原発のことには非常に興味を持っており、ここに座らせていただきました。

吉田悦花

ありがとうございます。それでは増田さん、お願いいたします。

増田尚宏

東京電力廃炉推進カンパニーの責任者の増田でございます。震災のときは、福島第二原子力発電所の所長をやっておりました。そのあと福島の中で、しっかりと廃炉に責任を持ってやるという立場になっております。

当社の原子力発電所の事故から3年半経ちましたいまなお、まだ、地元の皆様、また日本全国の皆様にご心配とご不安を与えておりますことを深くお詫び申し上げます。福島第一の廃炉、あるいは福島第一の安定化に向かってしっかりと責任を持って取り組んでいこうと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほどから皆さんのお話にもありましたが、現

場の様子が分からないというところが、いろいろ皆さんの東京電力、なんか隠してんだろうというところにつながっているんだろうと思います。ぜひその辺をしっかりと皆さんにお伝えできればと思います。

福島原発行動隊の方々には、昨年の1月に私が福島第二の所長としていたときに、8名の方にご視察いただきました。現場を見ていただいたりすることもできましたし、そのときからしっかりといろんなご縁ができたかなと思っています。ぜひ今後共、我々もしっかり情報提供しながらやっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

吉田悦花

はい、ありがとうございます。では、吉岡さん、お願いします。

吉岡 斉

私はこの経歴では、御用学者的経歴だけ書いてありますが、同時に18年間御用学者をやってきました。そのころから、始めのころから、原子力は将来やめるべきだというふうに言ってきて、原発ゼロがいいと18年間言い続けて、それでも御用学者をやめさせてもらえないという、独特の立場です。原発をやめる立場の組織もありまして、原子力市民委員会という専門家組織が、去年から活動していて、政策大綱みたいな代替的な政策、



代わりとなる現実的な政策を提案しようということ
とでいろいろやってきたわけです。今月からその
座長を務めています。両方にまたがるから、両方
の言葉遣いが、バイリンガルというふうなことで、
その長所は最大限活かしたい。今日のテーマ、収
束・廃炉のテーマに即して言えば、収束がまだも
うちょっと、この3年半うまくやれば汚染地帯を
狭められたと、そういう反省も込めて。でもいま
の収束条件としてどうやっていくのかということ
は、積極的に議論していきたい。

廃炉は私、最初から無理だと、解体撤去は無理
だと思ってたんで、100年200年の単位で、隔離・
管理するというのがいいんじゃないかと、その
辺もまたあとで皆さんで議論したいと思います。
よろしくお願いいたします。

吉田悦花

はい、よろしくお願いいたします。では名嘉さ
んですね。

名嘉幸照

福島から来ました名嘉と申します。たくさんの
先生方の前で、いまちょっと緊張しています。岸
井先生がお話になりましたとおり、とにかく原発
事故を収束させなくちゃいけない、そういうこと
で今日は、東京電力の廃炉カンパニーのプレジデ
ントであります増田さんが、陣頭指揮として現場
でやっておりますので、きっと本音が聞けると思
います。皆さんご期待ください。私も、皆さんへ
本音を言いたいと思います。

それから、福島原発行動隊は原発事故が起きた
3月の段階で、「現場をどうにかしなくちゃいけ
ない、福島をどうにかしなくちゃいけない、日本
をどうにかしなくちゃいけない」という素晴らしい
気持ちで、東電の幹部やその当時の原発担当大
臣だった細野剛志大臣にも提言しています。立派
な提案ですが、それから3年が経って未だに実現
してないことに私は非常に残念に思っています。
その思いで、今日は東京まで来ました。よろしく
お願いいたします。

吉田悦花

続いて、岡本さん、はいどうぞ。

岡本達思

こんにちは、福島原発行動隊の理事をしていま
す岡本です。私は、ずっと企業の広報の仕事をして
いましたので、福島原発行動隊では技術系では
なく主に広報活動であるとか、その後のロビー活
動、いわゆる議員の方々との折衝や質問主意書作
りとかの仕事をやってきました。初代理事長の山
田恭暉さん、今年7月に亡くなれましたが、山
田さんのお言葉に触発されて、この世界に入りま
した。今日はとても素晴らしい方々に来ていただ
いて、私も期待をしております。いろんなことが
学べればいいと思っています。よろしくお願いいたします。

福島原発 行動隊 とは

吉田悦花

はい、いまお話しいただいた
岡本さんが公益社団法人福島原
発行動隊ということで、まずは
福島原発行動隊の経緯と現状に

ついて、いま一度、岡本さんから10分程度でお
話いただきたいと思います。

岡本達思

皆さんも体験されたと思いますが、2011年3
月11日、私はそのときはもう現役の仕事はリタ
イヤしてまして、農林水産省の管轄の仕事を手
伝っていました。有機農業技術会議というNPOの
仕事で、3月11日は農林水産省の旧館で会議中
だったんですね。その旧館というのがまさに耐震
構造の途中で、右に左に1m以上揺れて壁も崩れ
て、とても怖い体験をしたんです。その後、ほう
ほうの体で霞ヶ関から家のある板橋まで7時間歩
いて夜中に家に帰り、確かテレビのニュースで福
島第一原発あたりの電源が全部切れてるというよ
うなことを聞きました。

その日は寝れないままにテレビのニュースに釘
付けになって、翌日ですか、福島第一原発の爆発
という報道がされたわけですね。午後にそれを知
って、ますます、どうしようかという思いを抱
いていました。たまたま有機農業技術会議の事務
局に仕事に携わっていたものですから、すぐにそ
のメンバー、日本の有機農業に関連する農学から

畜産学、地質学から放射能学までの分野の研究者たちと一緒に、30名ぐらいの団体が飯舘村、旧東和町、南相馬といった地域を視察し、現地の有機農業家の方々と接触を持ちまして会議をしたりしていました。その関係で1ヶ月ぐらいバタバタしてたんですね。

それが一段落し、自宅に戻って落ち着いたときに、たまたま届いていた茶封筒の手紙が、福島原発行動隊の初代理事長である山田恭暉さんからのお知らせだったんです。封を開けて手紙を読んで、えっ、こういう人たちがいるんだということで5月から院内集会に参加し、山田さんともお話ができるようになって、行動隊のその趣旨や理念について感じ取ったわけですね。それから、ここにいる仲間たちと一緒に活動し3年経ちました。

そもそも行動隊は、初代理事長の山田さんが、かつてない爆発を発生させた福島第一原発事故に危機感を抱いた有志の方々と共に、2011年4月に結成した組織です。福島第一原発の事故収束作業にあたる若い世代の放射線被ばくを肩代わりするために、比較的被ばくの害の少ない退役技術者、技能者を中心とする高齢者が、長年培った経験等の能力をもとに現場に赴いて行動するというのがその目的です。そして私がさらに共感したのが、各人の思想信条、さらに“心”の心情ですね、それについては一切問わずに原発事故の収束という大目的の一点のために行動するという理念にぐぐっと来まして、思わず飛び込んでしまったというわけですね。

このころの状況というのは、まさに体中に戦慄が走るような危機的な状況で、テレビニュースでは原発の上からヘリコプターで海水を落としたりとか、氷はないかとか電源やバッテリーはないかとか、そういうような状態が続いていました。東京にいる私に何ができるんだろうというような思いを抱いていたときでしたので、ここに参加し、以来ずっと活動を続けています。多様な考えと長年の経験や技術を備えたシニアの集団というアピールをしています、このアピールについては当時多くのメディアが取り上げまして、世界中からも取材がありました。現在も福島原発行動隊のホームページには、過去の取材がアーカイブで掲載されておりますけれども、フランスとかいろんな

国から取材が来て注目をされました。

そうした中で、その年の7月に当時の民主党政権によって承認され、福島第一の事故現場に入りました。5人の行動隊員が実際に現場を視察して、その所感を提案書という形で8月に政府・民主党政権に出しております。お手元に発表資料がありますけれども、その文書が載っておりますので詳しくはそれを見ていただければと思います。

視察後には、当時経産省の大臣であった海江田さんや、幹事長の細野豪志さんといった方々と折衝をもちましたので、私たちはすぐにでも福島第一に入れるのではないかなと考えていました。私たちは、若い人たちに代わって放射線量の高いところで瓦礫の処理でもなんでもいい、できることをやろうというような決意をもって、当時すでに全国から700名ぐらいの方が集まっていて、賛助会員も同じく700名ぐらいの方が名乗りを上げて、皆がそういう思いでいたわけですね。

ところが、いつまで経っても政府からも東電からも何の連絡がないという中で時間だけが過ぎました。私たちは、その暮れから書籍を出したり、いろんな取材を受けたり、もしくは講演をしたりという形で外に働きかけたりもしていました。実際、私個人も仲間と一緒に下請け会社に履歴書を送ったりして、なんとしても現場に入りたいなということでトライしてきましたけれど、いろいろな理由で入れないままに現在に至っています。今年も6社くらいに応募しましたが、全部振られました。

そこで私たちが政府に提案した内容を項目だけ言いますと、3つあります。1つは「事故収束作業への福島原発行動隊の当面の参加」ということ。命を賭しても前線に出るというような決意の中で、この言葉があったわけですね。2つ目は、原発施設内での作業者の最適配備を可能とし、「被ばく後の健康管理の仕組みの構築」を要望したこと。さらに3点目として「緊急対応の仮設設備を速やかに常設化し『中期的課題』取り組み体制を整備すること」という提案をしています。

いまでも、福島第一の防潮堤はそのままだと思うんですけども、瓦礫をワイヤーで束ねて積んだ形の仮設堤防のままではないでしょうか。そういう防潮堤に対する見直しの指摘であるとか、もしくは



は汚染水パイプの取り回しを、塩ビではなく鋼管にすべきではないかということを描きしています。当初の対応としては、よくやれていたなというような評価でしたが、これはあくまで一時的な対応であって、けっして1年2年3年と続くものではないと思います。そこからさらに新たな対応を願ってですね、そこら辺りの仕事が私たちにもできるのではないかなという思いがあったのですけども、残念ながら未だに実現しておりません。

私たちはその後、現場に入れない中で、じゃあ何をやらねばいいかということで、院内集会であるとか、アメリカに山田さんと私の2人で1ヶ月ぐらいかけて講演し、いわゆる外国の方から日本政府に揺さぶりをかけていただけるような働きかけもしてきました。そういうことも含めて陳情であるとか講演であるとか、いろいろなことをやってきました。

被災地への支援としては、川内村や檜葉町に対するモニタリング活動であるとか、私たち自身がモニタリングの知識を学ぶための研修会を開催したり、もしくは請願署名なども政府に提出してきました。去年の9月には安倍政権だったり、自民党の復興加速化推進本部の大島本部長や塩崎副本部長や原子力規制委員会の田中委員長らに要望書を出しております。しかしながら、残念ですが当初目的に掲げていた、現場において若者に肩代わりして作業するということは未だに果たせていません。

去年の1月でしたか、増田さんが福島第二の所長のときに、私たちの視察を快く受け入れていただき、実は私も同行させていただきました。そのときの説明をうかがい、増田さんの被災後の手際

の良さには、たいへん感心させられました。福島第二も福島第一とほとんど同じ状況にありながら、福島第二はかろうじて助かった。それは多分に増田さんのリーダー力のお陰で、下にいらっしゃる方々が頑張ってくれたのではないかなと、現場を見させていただいて改めて実感いたしました。

その増田さんが、今度は福島第一のリーダーになられたということは、とても心強く思っております。ただ一つ、私たちは先ほどお話しした提案にもあるように、東京電力1社が福島第一原発の事故収束作業にあたるというような規模ではないのではないかと認識を持っております。これはもはや国を挙げての国家的事業として当たるべきではないかと私たちは提案しています。現在、増田さんがリーダーシップを取られている廃炉カンパニーの作業については敬意を持って受け止めておりますが、やはり限界があるのではないかなと。もっと国際的な支援の下で戦略的な取り組みをしなければいけないように思います。そうした事業のリーダーに増田さんがなっていただきたいというのが私の切なる希望でございます。

吉田悦花

ありがとうございました。福島原発行動隊の経緯と現状についておおよそですが、ご理解いただけたかなという気がいたします。そこで、岸井さんに、シニアの登用についてのご意見をうかがいたいのですが、よろしいでしょうか？

原発を離れても様々な場面でシルバーの活用は、超高齢化社会では必須ですが、その辺のお話をいただければ・・・。

岸井成格

そうですね、シルバーの問題でいいですよ、先ほど紹介させていただいた植林のNPOは、中心になってやってくれている人たちはみんな退役軍人ではありませんけども、JRとかNTTとかそういうところの組合を辞められ山に入ってきています。特に、足尾銅山跡地って、はげ山なんですよ。それから八幡平の松尾鉱山、これも硫黄山です。そういう鉱害で完全にはげ山になったところから木を植えようと、ドングリを集めて子どもたちに苗木を作ってもらい、そういう作業をやってもらっています。

やっぱり年の功なんですね。そういう経験とか、ものすごく役に立つんですよ。私も今月、古稀になりましたのでそれは実感しています。中身まではよくわからないんですけども、福岡県知事の小川洋さんが高齢者特区というものを作ろうとされている。できるだけ国民の皆さんに知っていただきたいと、近く対談をして紙面でご紹介しますけども。その取り組みが非常に注目されているようなので、また機会があればご紹介します。

それから福島原発行動隊には、改めて敬意を表したいと思います。ちょうど3.11のときには私、編集最高責任者の主筆という立場だったんです。で、そのときにやっぱり取材をどうするか、どこまで行かせるかという放射線量の問題などがあって、当然ですけども社内で議論になりました。それでとにかく年寄りから先に行こうと「行くやつ名乗りを上げろ」って、そういうところから始まりましたして、ちょっと福島原発行動隊の発想と似てるところがあったんですね。

毎日新聞としては、原発に対する立場はそのときからすぐゼロは無理だろうなということで、そこまでは踏み込めなかったんですけど、「脱原発依存」が最初です。いまは「脱原発」という立場をとっています。

それから、先ほど福島原発行動隊の方からお話がありましたけれども、私もとてもじゃないけどいまは東電だけに事故収束作業を任しては無理だろうと思います。やっぱり国がもっともっと前面に出て、シニアの活用も含めて国家プロジェクトにするべきだろうと。さきほど名前が挙がりました、自民党の副総裁をやっていた大島理森、あれ

は毎日新聞の後輩です。それから今度、経産（省）副大臣になって原発担当になった高木陽介という議員がいます。彼は公明党ですが、これも毎日新聞の私のずっと後輩です。一昨日も会いましたが、今後は福島原発行動隊から言われるようなことも、橋渡しっていうと大げさですけど、いろいろ要望をぶつけてみたいなと思っています。

吉田悦花

岸井さん、ありがとうございます。それではえりのあさんに、いまの福島原発行動隊のお話をうかがっての感想というか、どんな思いを持ちましたか、若い世代を代表してお話してください。

えりのあ

はい、私は栃木県の方で被災して、震度6強の地震に遭ったんですけども、その一週間後に、まず被災された方が避難してるところに行ったんですね。お水を1万本届けに行ったのですが、3年半が過ぎてどんどんどんその数が少なくなっている中で、シニアの方に活動していただくってことはすごく必要なことだなあと感じています。

私の父も、東電は引退していますが、実際にいまも福島の方に足を運んでいます。福島原発行動隊の一員にはなっていませんが、それぞれがそれぞれに動いているんじゃないですかね。私自身もボランティアの方がどんどん少なくなる中で、自分自身も一人の人間として、被害者であるという意識よりは、一人ひとりが意識を持って国レベルで発信して行かなきゃいけないかなと感じています。

福島第一 原発の 現状

吉田悦花

ありがとうございます。それでは増田さんに、お願いいたします。

増田尚宏

福島第一の現状をまずお話しさせていただきますと、いま、毎日6,000人の方に作業に入っています。東京電力の社員は、廃炉推進

カンパニーという組織を社内に作りまして、福島第一では1,000人ほどが活動しています。ですから毎日7,000人の人間が、福島第一の構内で働いてもらっているという状況になります。

事故から3年半が経ったわけですが、この3年半の間、私は去年の夏までは福島第二に引きこもっておりました関係で、福島第一の様子よりも福島第二を優先的に見ていましたが、そのときを含めて福島第一では正直な話、目の前の火の粉を振り払うのが精いっぱいという状況の仕事のやり方でした。

先ほど岡本さんのお言葉の中に「まだまだ一時的なものとしてはいいかもしれないけど、これから使っていく設備としては物足りないじゃないかとおっしゃってましたが、まさにその通りで、いままでは目の前の火の粉を振り払うために必死になってやってきて、なんとかここまで持ってきたというのが福島第一の状況です。

で、この辺りからちょっとフェーズが変わってくると思います。まだ、汚染水では皆さんにご迷惑をおかけしているように、度々新聞にもいろいろ報道されていますが、いまはやはり水問題があります。これを来年3月くらいまでに一段落するところまで持っていこうと思っています。その後はしっかりと地に足のついた仕事になると思っていますんですが、そこから設備も新たにしていくなかで、あるいは働きやすい環境を作るといふように持っていきたいと思っています。

いまは、火の粉を振り払う環境からです。廃炉推進カンパニー作って6ヶ月ほど経ったんですが、この間に3日先から3ヶ月先くらいまでは、見通しながら仕事ができるかなというところまでは来たと思っています。現在はそういった状況の中で仕事をしてもらっています。

原子力発電所の時代に働いていたときとの違いは、原子力発電所というのはそれなりに、東京電力も17プラント持って頑張っていたんですね。今回こんな形にしてしまったので申し訳ないのですが、そうは言ってもそれなりの運転経験とメンテナンスの経験を持ってやってきました。トラブルもいろいろ起こして皆さんにご心配をおかけしましたが、その中でいろいろ培ってきたものがあって、例えばちょっと水が漏れてもすぐに対処

でき、皆さんに迷惑をかけない状態を維持してきたわけです。

ところがいまの福島第一は、いってみれば原子炉、压力容器という昔大事だった場所はいまはあまり大事ではなくて、それより目の前にある汚染水の入ったタンクの方がとっても大事な状況になっています。そのタンク一個から水が漏れれば、あっという間に海に汚染水が出てしまっ、皆さんにご迷惑をかけるという状況になるわけです。

ただ、発電所で働いていたときの人間は、技術的なレベルはあっても、汚染水の入っているタンクから水が漏れたということに対する感覚が悪かったのは、正直な所あると思っています。というのは、それまでのプラントであれば、例えば水が漏れてもすぐに外に出ないんですね。あるいは水が漏れるという状況になるまでに、いろいろ策が講じてあるわけです。水が漏れないような策が講じてあったわけです。

福島第一の中では、この3年間は無理矢理作ってきた設備なので、そこができなくなっていたのです。皆さんには、この3年間、何でこんなにトラブルを起こしてるんだろうって、新聞などを読んでいただいて多く疑問があったのではないかと、と思っています。いまそこが、ようやく変わり始めたと思っています。もう少し、時間はかかるかもしれませんが、そういったところまでようやく来たという状況です。

福島原発 行動隊に ついで

吉田悦花

ありがとうございます。

では続いて吉岡さんから一言、福島原発行動隊に対してご感想をお願いします。

吉岡 斉

政府事故調で、2011年6月30日に、まず第二に行ってそれから第一に行きました。第二では増田所長にお会いし、ほんとに危ない状況、津波が坂を登るという、その中で非常に的確に、金曜の午後、明るい時期に襲ってきたというのが幸運であって、土曜や夜だったら危なかったという話も聞きました。なんとか第二は救われたということ

で増田さんには感謝申し上げたい。

福島原発行動隊の組織、非常に重要な仕事、役割を担っていると思ってます。私たちの原子力市民委員会は原発をゼロにするというのを是とするわけです。是は是、非は非は、重要だと思いますので、私たちの報告書にもこういう言葉が書いてあり、若干引用します。

被ばく労働に対する長期的な態勢を組み立て直さなくてはならない。これは百年先までを見通して、廃炉作業という被ばく労働にあたる人材を確保するという課題と重なり合う。すでに労働力不足、特に熟練労働者の不足が露呈している。このため作業員の募集採用と並行して、ボランタリーな熟練技術者集団の組織化にも着手する必要がある。ということで、行動隊にはエールを送りたいと思います。

吉田悦花

ありがとうございます。それでは名嘉さん、お願いします。

名嘉幸照

皆さんのお話を聞いて、私も少し安心しました。いま、お話があったように、増田さんが所長だった福島第二原発の話でいうと、私のうちは富岡町の港のちょっと小高い丘のところであって、第二原発までだいたい2キロぐらいで、ちょうど家の前に第二原発が見えたんです。3.11に真っ黒い津波が来たときにも、まずは目の前の第二原発を見ました。津波が第二原発の脇の川に向かって上り、さらに防潮堤に殴りつけるように突き上げられたときには、屋根までしぶきが上がってました。そのときは、これはだめだなと、ちょっともう絶望的になったんです。

で、私は第二原発よりも第一原発の方がかわいいもんだから、第二原発はどうでもいいって思ったわけじゃないけど、第一原発の方に意識がいつてたんですね。いま、増田さんが説明されたよう



に、第二原発も非常にたいへんだったけれど、その時間帯には十分な人材が確保されていました。福島原発行動隊の人材に関していうなら、私は事故後、これからの事故収束、廃炉に向けた人材を各方面に呼びかけているわけで、それはとても必要に思います。

もう一つ言いますと、大震災が起こって、岩手・宮城の両県は、復興についてなんとなく先が見えているような気がします。振り返って福島県を見ますと、この原発事故は福島県から将来の夢を奪っているように見えるわけです。いま、お話がありましたように、第一原発も第二原発も格納容器が破壊されていなかったことは、申し訳ないけど不幸中の幸いだと思います。格納容器が破壊されていたら、皆さんと今日こうしてこの席でお話しできませんでした。そういう面では、これを教訓に、美しい私たちの国土を作るために一緒にご協力をお願いします。

吉田悦花

はい、ありがとうございました。皆さんに福島原発行動隊に対するお話をいただいたんですが、どうでしょう、それを受けて岡本さんに一言お話をお願いします。

岡本達思

さきほど増田さんから、現在福島第一原発では7,000人が働いているというお話がありました。アメリカのスリーマイル島原発の事故のとき、これは1979年のことですね。スリーマイル島では圧力容器の中で燃料が溶けたのですが、その圧力容器の燃料デブリを取り出すのは事故発生から5年後の1984年からでした。それから6年間かけて一基の燃料デブリを取り出した。で、その取り出すときの被ばく作業にあたった人間の数というのは事故のときの倍以上、ですからいま、福島第一原発で7,000人だとしたら、その倍以上の人間が必要とされていたというデータを見たことがあります。

福島第一原発は、燃料デブリの取り出しはいまのロードマップでは2020年ぐらいだと思うんです。そのときにはそういう人間が必要であると、

人的資源が必要であると思います。なおかつ、福島第一の場合は、压力容器だけじゃなくて、压力容器を破って下の格納容器まで溶け落ちているという。しかもそれが3基もあるというような状況の中にあり、増田さんとしてはとてもたいへんな状況下で仕事しているはずなんですね。2020年というのは、いまが2014年ですからあと6年後にそういう事態が来るんです。徐々に終わるのではなくて、これから来るんです。私たちはそのところに向けてですね、国家的な取り組みでいまから準備をしないといけないのではないかなと思っています。

この点、増田さんに色々とお話を聞きたいなと思っています。

吉田悦花

ありがとうございます。現場を知る増田さんには後ほど深く深くお話をうかがえるかなと思うんですが、その前に岸井さんのご意見をお聞かせいただけますか？

岸井成格

国家的事業にしなきゃなんないという、いくつもの提案があったりいろんな議論がされてるんですけども、最近私ね、環境問題のからみで言いますと国連IPCCってご存じでしょ？あの、気候変動のすさまじい変化が問題なんですよ。IPCCの報告書づくりは私も多少お手伝いをしたのですが、今世紀末に「人類生存の危機」って言ってるんですよ、最悪の場合はですよ。いちばん顕著な変化が、アジア太平洋における台風と大雨の大型化なんですよ。

長雨も段々段々と局地的集中的になってきて、このあいだの広島のようなことが起きちゃうんですね。山裾なんかほんとに危なくなってるでしょう。だから、これはもう東電だけでどうこうっていう問題じゃないと思うんですね。こういう気候変動に関わる場所の総合的に国家プロジェクトとしていろんなことを考えなくちゃいけない、その段階に入ったんじゃないかなって気がしてるんですけどね。これはね、ほんとに深刻な問題ですね。

福島 第一原発で 起きたこと

吉田悦花

それでは増田さんに、現場で何が起こっていて、皆さんが具体的にはどのような仕事をして下さっているのかということをお話いただけますか？

東京電力の社員の皆さん、協力企業の方やOBの皆さんも参画なさっているとうかがっていますが、その辺りのお話をお聞かせください。

増田尚宏

岸井さんがいるから申し上げるわけではないですが、毎日新聞さんが9月13日の記事に、結構きれいなイラストが出ています。非常に分かりやすく我々がやっていることの全体の繋がりを表現してくれていると思っていますので、ちょっと古い新聞ですがご覧ください。

福島第一原発の事故については、まず爆発をさせてしまったということが一つあります。その結果、汚染水がどんどん増えているっていうこと。もう一つはこのあとの、海にいろんなものを出してしまっていたわけですが、その3つの問題があると思っています。一般的な原子力発電所の場合は止める、冷やす、閉じ込めるっていう3つが、これからの再稼働に合わせても皆さんにしっかりご容認いただく物差しだと思うんです。

今度は悪口で悪いんですけども、新聞とかテレビで何を言おうが、「止める、冷やす、閉じ込める」っていうところがしっかりしてるかどうかという感覚で見えていただくのがいちばんだと思います。福島第一原発もそういう意味では同じです。で、その「止める」っていうのが、しっかりと燃料を冷やし続けるということですね。「冷やす、閉じ込める」というところの「冷やす」は、燃料を冷やし続けているという状態がずっと続けばいいんですが、そこに地下水がどんどんどんどん流れ込んでしまっているので汚染水が増えているということです。

いま、福島第一原発では、だいたい1日あたり400トンぐらいの余分な水が、地下水が流れ込んでしまうために、汚染水として400トンが余計に発生しています。航空写真とかでご覧いただくと、タンクがいっぱい並んでいるのがお判りいただけ

と思いますが、あれが
だいたい1個1,000トン
です。ですから2日半に
1個タンクが増えている
という状況です。この汚
染水を止めて、なんとか
して増やさないようにす
るということをやらない
と、次の段階に進めない
と思っています。



で、入ってくる地下水を減らすために地下水バ
イパスといって、もっと上流側の汚染する前に汲
み上げた地下水を海に流させていただくとか、こ
れは漁協の方にご理解いただくのに1年ほどかか
りました。まだ汚れてないということを我々は主
張をさせていただいたんですが、それでもご理解
はなかなか難しかったです。いまは、苦渋の決断
という言葉を賜りましたが、なんとか放出させ
ていただくようになりましたので、この信頼を
裏切らないようにしっかり続けていきたいと思
います。このあとは凍土壁とかあるいはサブド
レンを汲み上げるということで、汚染水を増やさ
ない作業をやっていきます。で、汚染水を増やさ
ないのがしっかりコントロールできるようになっ
たら、次の段階に進めると思います。

そして、もう一つが「閉じ込める」です。施設
内から外に汚染物質を放出させない、あるいは気
体として汚染物質を拡散させないという作業を
やっているところです。これも安定した状況を
しっかり保っていければ、あるいは地下水を増や
さなければなんとかうまくコントロールできると
思っています。

それが安定したあとで、先ほど岡本さんのおっ
しゃったデブリ燃料の取り出しに入るのだと思
います。まだ、デブリ燃料の取り出しの前の、使用
済み燃料を取り出すという作業をやっている最中
でございまして、これもまだまだ時間がかかります。
それが終わってからデブリ燃料の取り出しに入る
んですが、これもデブリ燃料、溶けた燃料がどこ
にあるかというのはまだわからない状況なんです
ね。我々も、建物の中にそんなにアクセスできる
わけではありませので、どこにどういうふうに
燃料がたまっているのかをしっかりと見極めた上で

取り出し方を考えていくということになります。

先ほど岸井さんの言葉に、東京電力だけじゃ無
理だと仰ったのは、まさにこのところにあると
思ってまして、原子力の世界以外の人にも来ても
らわないとだめです。燃料がどこにいま、溶け落
ちているかっていうのを見極める技術というのは
原子力の技術じゃなくて、もしかすると内視鏡の
ような形で、いろんなことをやってらっしゃる方
の技術ですとか、あるいはニューロンっていうん
でしょうか、宇宙線を使って何かものを投影して
いくといった技術が必要だったり、その後には、
ロボットの技術を必要とし、中にアクセスするこ
とが必要になってきます。それがあって初めて燃
料デブリの取り出しにかかれると思っています。

まだまだ10年、我々が10年という予定は作っ
ていますが、まだまだどうなるかわからないとこ
ろもあると思います。その中で福島原発行動隊の
方に申し上げたいのは、私たちは責任を持ってや
らなくちゃならないことのひとつに、一般公衆の
方をしっかりお守りするっていうのがあります。
地元の方については避難していただいているわけ
ですが、戻っていただく、あるいは二度と避難させ
ないためには、これ以上の悪い環境にしないよう
しっかり守ります。

もう一つは、働いていただいている7,000人
の人たちに怪我をさせたり健康被害を与えては
いけないということです。これをしっかり守ん
なくちゃだめだと思っています。このあとまた話
が出て来ると思いますが、皆さんといっしょにど
うやっていくかっていうときには、怪我をして
いただいちゃまずいということ、あるいは責任
を持ってしっかり仕事していただく必要がある、
あるいは健康被害や被ばくをむやみにしていただ
くわけにはいかないということをご理解いただ
くことが必要だと思っています。

OBやシニア の活用は ついで

吉田悦花

ありがとうございます。シニア
の人材活用という点について
は、OBの方たちが具体的にど
んな現場でどんなふうに働いて
らっしゃるのでしょうか？

増田尚宏

はい、福島第一原発というのは皆さんもご承知のように1970年代にプラントを作った場所でございます。ということは、当時、ばりばりで働いていた人たちは皆さんの年代の方が多いだと思います。いまの人間が、格納容器の中で燃料が壊れて溶け落ちてるといっても、中のどこにどんなになってるかっていうのは、昔の方のように隅から隅までかけずり回った年代ではありませんので、わからないところもあります。

そういったところを含めてですね、いまは我々の会社をリタイヤされた方でも、関連企業の中に入っていて、我々の相談相手になっていたと思います。関連企業、一緒に働いていただいている7,000人の人たちがいる企業と思っていただけなのですが、そういうところで働いていたいてる方もいらっしゃるし、あるいは逆に外から、我々を任意でエールを送りながら支援していただいている方もいます。

東京電力が、情報発信が下手だというふうに言われますので、今日はぜひ私もその辺のことをここで勉強させていただきたいと思っています。我々が一生懸命発信しようとしている情報と、皆さんが欲しい情報が多分かみ合っていないんだと思うんですね。我々が、これが大事なんだと思っ出て出してる情報じゃないところに、多分皆さんの必要とされる情報があるので、そういった情報が何かを勉強したいんです。そういった意味でも、OBの方々も皆さんと同じようにその雰囲気の中に溶け込んでいただいて、いま、東電の中でどうということやってんだろう、福島第一原発の何が行われているんだろうってことを、色々な方に説明をしていただいたり、除染の手伝いをしていただいたりしています。OBの方はいっぱいいらっしゃいます。

吉田悦花

ありがとうございます。現場のお話が出ましたので、名嘉さんにぜひマイクを取っていただいておりますので、お話いただけますでしょうか？ この『福島原発、ある技術者の証言』というご本にも書かれておりますけれども、やはりOBをもっともっと活用してほしいというようなことも書かれていたように記

憶しております。その辺りのところもぜひ皆さんにお話をお願いいたします。

名嘉幸照

私もかなり年配ですので、まあ文章書くような柄でもないし、やっぱりこれまでの過去を見つめて何が問題だったのか、この原発事故は避けられなかったのか、あるいは今後この原発をたたむにはどうすればいいのか、あるいは将来の原発はどうあるべきか、色々考え現場の一技術者の独り言ということで書きました。

東電さんからは意地悪じいとも言われるんですけども、昔の仲間だったからそう言われても響かないんですけども。まず、私が40年以上原発と共生してきて、地元に住んでいるので一応被害者でもあるんですけども、もっと大きく言えば加害者という認識も持っていました。それをその本にしたということですね。

ところで、本題の人材確保、シニアの活用については先ほどお話ししたように東電の幹部や細野大臣にもみんな、立派な提案が届いています。増田さんの話の中で、現場に5,000人から7,000人も作業員が入って一生懸命仕事をしています。私は原発事故以後に以下の提案をしてきました。



一つは、東電以外の電力会社の応援。確かに3月11日の原発事故以後、各電力会社から応援に来ていましたが、主に福島第一の方でほとんど後方支援でした。その後、1ヶ月2ヶ月3ヶ月が過ぎ各電力会社の人々が皆、引き上げていきました。一方、福島県には全国からの警察、県警の応援がいまでも続いています。各県からの県庁職員の派遣もいまでも続いています。本音からいえば電事連、全国電気事業連合会、どういう会なのか非常

にいまでも疑問に思っていますが、もう少し電事連が動いても良いのではないかというのが私の主張でした。

二つめは、いま、福島原発行動隊も主張されていますが、電力会社、これは東電さんも含めてですが、メーカー、ゼネコン、協力会社のOBを活用すること。この人たちは経験や知見を持っていて、まだ体力だって充分あります。おそらく体力でいえば増田さんよりも元気のある人がいっぱいいます。

ちゃんと健康診断、例えがあまりよくないかもしれませんが、皆さん戦前の徴兵検査を思い描いてみましょう。甲種合格、乙種合格、まあ皆さんの中で戦前生まれは少ないと思いますけど、そういう時代がありました。甲種合格は現地の戦場に出向き、丙種合格は後方支援。福島原発行動隊の人たちだって、メディカルチェックや体力テストをして、それぞれの技術分野を仕分けすれば、いろんな活用する方法があるんです。

うちの会社も若い社員が多いので、これ以上、継続してあまり被ばくをさせたくはないわけです。いまは年度ごとに配置転換していますけど、やっぱり福島原発行動隊のシニアの皆さんの気持ちをどうにか活かしてあげたいと思います。これからの原発の収束・廃炉に向けて、あるいは福島県の復興のためにも活用できればいいなと思っています。よろしくお願いします。

吉田悦花

はい、ありがとうございます。いまのお二方のお話を聞いて、吉岡さんはどう思われましたか？

吉岡 斉

福島原発行動隊は現在も、非常に士気が高いというふうに思っています。私としては、いまやはりいちばん気になるのは、廃炉が解体撤去という形でなされるか、隔離管理、いわゆるチェルノブイリの石棺みたいな方式か、どっちになるか含めて、いろんな可能性があるけれども、多分後者の方に落ち着くと思うんですけれども。まあ私の予想では100年200年かかるわけです、多分。

普通の、事故を起こしていない原発についてもイギリスなんかでは22世紀に廃止とかそういう

ようなこと言っていますし、事故を起こした炉というのは22世紀でも間に合わないかもしれない。23世紀以降ぐらいかなと、つい思ってしまう。その場合に、シニアってなんだろうっていうのが、すごく気になるわけです。だって、いま20歳の人もわずか40年でシニアになっちゃう、生まれた人は60年でシニアに。

こういう人たちも、もしかしたら持続的にやってかなきゃいかん、そのためには、ある程度それに頼らなければやっていけないと思うんですけど。何が必要なかなって、そのためには、やっぱり被ばくを最小化する、無理はしないで時間を武器として活用するとか、そういうようなことをやって、長期化はそれはしょうがない。ですから、作業員の被ばくが少なく済むような計画に、いずれ修正していかなくちゃいかんと思うんですけども。長期的にそういうシニアという概念がやっぱりなくなってしまいそうな気がしていますね。どうですか。

吉田悦花

どうですか、岡本さん、じゃあ、お答えを。

岡本達思

答えというわけじゃないんですけども、人口ピラミッドってありますよね。戦後生まれの団塊の世代は男女ともに広がって、いまの若い人たちはすばまっているような。こういう日本の人口ピラミッドを見据えたときに、私たち自身はいま700人の集団ですけども、700人でできることはそんなにあり得ないと思うんですね。私たちも、「福島原発行動隊が・福島原発行動隊が」と言ってますけども、私たちとともに、私たちに続く世代に私たちのようなことができる、そういうような仕組みを作らなくてはいけないのかなっていうことはいま、大きな課題の一つとして話し合っています。

人材を育成していくとかですね、それで常に、40代以降、50代以降、60代以降の人たちがこういう作業にも当たれるというような、そういう仕組み作りこそが、これから必要なのではないかなと思います。これはまだ私個人の考えなんですけども、そういう考えを企業との協力の中で、企

業で現役を退いていく方ともうまくタイアップして、そういう人材を育てていく。そこに私たちとしても役立てていけるならば、たとえばそうした指導に参画するとか、そういう事業を継続してかなくちゃいけないのかなと思うんです。

ただ、これはボランティアとしてできることではないんですね、やっぱり国の仕組みの中で考え、きちっと位置づけてやっていかなければいけないことだと思ってます。それについても私たちは今後、提案をさせていただいて、その中の一つの役割を担えればいいのかになっていくような感じではいます。

何も、私たちが福島第一に入りたいたいということだけで考えているわけではないんですね。それと、先ほど吉岡先生がおっしゃってましたが、いまの福島第一の状況だけじゃなくて、日本に52基の原発がありますよね。その原発の耐用年数は40年、50年、60年っていうように議論されてますけども、福島第一が1970年にできてその耐用年数がもういまにきている。それがあと10年後にはいくつもの原発が、日本のあちこちにある原発自体も廃炉に向かっているわけです。

そういう中でますます福島第一の事故対応で経験して得た様々な資源っていうのも必要なんですね。それ以外の、いまは稼働してませんが再稼働しようとしている原発だったり、そういうところも耐用年数を迎えてくれば、そこも廃炉ということを考えなければいけないわけですね。で、そ

の作業にはいまの福島第一のノウハウを活かすことはできると思うんです。ですからそこは、現時点から同時に視野に入れてやっていくと。

そういう意味でも、やっぱり申し訳ないんですけども、東電1社でお考えになってると、どうしても福島第一の問題だけ、まあ、多分そういう視点もどこかにはあるでしょうし、そういうネットワークというかは研究機関の中ではやってると思うんですけども、やっぱりそれは国の事業として取り組んで行かなければいけないということがあるもんですから、私たちは国家プロジェクトと言わせていただいているんです。

吉田悦花

それでは、増田さんに続けてお願いします。

増田尚宏

皆さんからいろんなことが出されて、一つひとつに全部答えたくて、いっぱいになり過ぎると答えられなくなってしまうので、ちょっとここで口を挟ませていただきます。

まずいま、福島第一で被ばくがどのくらいあるかっていうことを実態として皆さんにお知らせしないとまずいと思うのですが、震災直後の平成23年の3月いっぱい、いちばん多い人で30ミリシーベルトくらい被ばくをしています。1ヶ月内、3月11日から3月終わりまでです。

で、いまはどうかということですね、だいたい月



に平均して0.8ミリシーベルトぐらいです。という事は、1年間にかけ算すると12倍していただければいいので10ミリシーベルトぐらいです。これが現在のだいたいの平均の値です。被ばくがどんどん増えてしまうと働けなくなってしまうわけで、それは我々にとっても不幸なんです。ましてや東京電力の人間だけがいてもだめなんですね。一緒に働いてくれる6,000の方々がいないと仕事が成り立ちません。先に進まないということです。そういう意味でも、さっき岸井さんから何回も出ている国家プロジェクトだと思うんですが、東電だけでできるわけないというのは正にその通りなんです。

いま、我々と一緒に働いていただいている元請けさんが57社ほどあります。ちょっと脱線しますが、私は今年の夏、偶然ですが『黒部の太陽』っていう映画を観ました。あれを見てると、熊谷、間、鹿島、大成といった名前がざっと並んで出てきて、ほんとに皆さん必死になって働いている様子がうかがえました。あそこに出て来る会社はみんな福島第一で働いてくれています。いまとあの時代とはちょっと様子は違いますが、ああいった形のですね、仕事がみんなで行われているっていうことをイメージしていただければと思います。

で、吉岡先生はじめ皆さんから出ている、先の長い仕事なんだということはまさにその通りです。30年、40年というところで一応廃炉の、だいたいの集大成に持っていこうということは考えていますが、実際のところ、吉岡先生がおっしゃるようになりますね、先のことはまだ誰もわからないと思います。その中で仕事をしていくわけですから、失礼ですけどここにいらっしゃる方々が、目の届くうちに廃炉が終了しましたということにはならないと思います。

ということは逆に言えば、若い人にずっとやっていただく必要があります。そういう意味での人材育成は非常に必要です。私のいまの思いは、あまり先伸ばしてもしょうがないのでここで述べさせていただくと、現場で働いてもらうということについては相当の責任が伴います。それを皆さんにやっていただくよりは、やはりもっと若い人に働いてもらう。被ばくはちゃんとコントロール

できていますので、先ほど申し上げたように作業やっただいていただいている方がいちばん安全、安心して働く環境を作るのがいちばん大事だと思ってます。

ですから、その工程とかですね、地域の方々に迷惑かけないようにさっさと終わらせたいっていうことで、作業やってる人を危険にさらすなんていうことではなく、作業やってる人の安全を、ちゃんとバランス見ながらですね、そちらの方が大事だったら仕事を延ばしてでもそうしたことをキチンとするということも、勇気を持ってやっていく必要があると思っています。

そういった形で仕事やっておりますので、まんべんなく若い人にやっていただいて、皆さんに期待したいのは、まずは現場の福島第一で働いてる人たちが、日本にとって素晴らしい仕事をしているんだというエールを送っていただいてですね、東京電力にはエールを送っていただく必要はないと思ってますけども、やっぱり現場で働いていただいている人っていうのは、世のため人のために働いていただいているわけです。

あの方々がいなくなったら事故収束ができなくなっちゃう。あの方々が働いている中でモチベーション高く持っていただくには、やはりあの人たちのプライドっていうんでしょうか、矜持っていうんでしょうか、そこを大事にする必要があると思います。そこをしっかりと皆さんが見守っていただいたり、そこをバックアップしていただくのがいちばんありがたい。

そしてもう一つが、若手の指導です。やっぱり人材を育成していくことが大事だと思いますので、その人たちを皆さんの観点で育てていただきたいと思います。しかし、皆さんを期待させても仕方ないので、ここで申し上げたいのは、皆さんが現場に入って、例えば原発行動隊っていう名前で仕事を取るぞとおっしゃっていただいても私は発注しません。これは皆さんがですね、放射線管理できますか？品質保証できますか？責任とれますか？バルブ1個、ミスで閉めちゃったり開けちゃったりしたときに、皆さんが損害賠償できますか？っていうことを考えると、それは無理だと思います。

そういった形で働いていただくよりは、いまあ

る元請けさん、あるいは一緒に働いているたくさん
の企業さんの中に入っていて働いていた
だか、あるいは先ほど私が申し上げたように、
働いてる人をしっかりと、親の立場っていうんで
しょうかね、皆さんがその、シニアっていうから
には親なんだと思います。親が子を暖かく見守る
ように、私もそういうふうにできればいいんです
が、私あんまり暖かく見守ってないんですが、親
が子を見守るようにエールを送ってもらうとかで
すね。「よし、よくやったな!」と褒めていただく、
そこでがんばっていただくっていうのはいかがな
ものでしょうか。

吉田悦花

はい、では岸井さん、手を挙げていただいたの
で、どうぞ。

岸井成格

いいですか。余計なことかもしれませんが、
いま元請けの、ゼネコンの人たちのことが出まし
たけどね。実をいうと人事の裏っていうのは面白
いものがありまして、さっきご紹介した経産省の
副大臣になんで高木陽介がなったかっていうのは
ね、こんなことなんですよね。つまり同じ公明党
の太田さんが国交大臣だからっていう、そのため
のケアをどうするかっていうことが重要なんです
ね。今度の人事のポイントでもあるんですけど、
中々これ、見えにくいところがありますけどね。

それからあの、人材育成の中で私、ぜひお願い
したいのは信頼の回復ですね。情報の。やっぱり
まだまだ、メディアにとっても、東電や経産省や
ら環境省が発表してるようなことは「ほんとかな？」
っていうね、非常に懐疑的なんです。私の
やってる森のプロジェクトも、親から子どもた
ちまでみんな森に入れていろんなことをやるん
です。で、先ほど申し上げたように今度、南相
馬なんかで植林をやったり、防潮林づくりをや
ったり、子どもたちもどんどん参加してもらいた
いんですけども、やっぱり「福島」っていうと躊躇
してしまう。だからそういうところ、やっぱり正
しい情報を出して信頼を回復するっていうことが
ものすごく大事なんじゃないかな。これは国際的
にもそうですけどね。お願いですけど、ぜひ、信

頼回復のための情報発信をやってほしいと。

東京電力の
「廃炉推進カ
ンパニー」
と社内組織

吉田悦花

まあ、皆さん色々あるんです
けども、増田さんへの素朴な疑
問として、福島第一廃炉推進カ
ンパニーは、東京電力の中の社内カンパニーとい
うことですが、その位置づけをいまひとつ詳しく
教えていただけますか。

増田尚宏

一般的にカンパニーっていうのは金を稼ぐんだ
と思います。しかし、私たち廃炉推進カンパニー
は、いっさい金が稼げないっていうことがあります。
こんな事故を起こしてしまい、それを収束さ
せるためのものです。その元手は、元の資
金はどこからかっていうと、東京電力の中には実
は3つカンパニーがあるのですが、その中の電
気を起こして、それを皆さんのところにお配りし
て、料金を収入とするカンパニーが上げた収益を
私のカンパニーにつぎ込んでもらって、福島第一
の安定化、あるいは事故収束のために使っていま
す。ということで社内的にも、廃炉推進カンパニー
というのはちょっと他の一般的なカンパニーとは
違ってあの、お金を儲けなくて仕事をやってる場
所です。

なぜカンパニーという名前にしたかというと、や
はり意思決定を早くしようと。東京電力は非常に
大きい会社で、一つひとつの意思決定が遅いとい
うところがあります。それともう一つが、「東京
にいてなぜ福島のことをわかるんだ」ということ
で、もっと福島にしっかりと近づいて、密着して
福島の人々の思いを聞いて応える。先ほど岸井さ
んからも、「なんだお前、正しい情報をちゃんと出
してないだろう」と言われたんですけど、私は
出してるつもりなんです。そういったところ、
密着することが大事だということで始まりました。

半年経って私はいま、もっと大事なことがあ
ったなと思ってます。それは、東京電力の原子力
の人間は電気を起こすために入ってきています。
原子力を使って電気を起こすというのが、どう
しても私たちの頭にあって、その中で「廃炉?」「後

始末？」という思いの中で仕事をやってきていました。この3年間、みんなのジレンマとしてあったんだと思います。それをもう、廃炉に特化して仕事をやるんだと。いままでの原子力の設備とは全く違うんだということを意識づけるためにも「廃炉」という名前をつけたのはよかったと思います。みんなが「廃炉のために仕事してるんだ」という意識でいまは仕事をしてくれていると思います。

先ほどの「廃炉推進カンパニーって何やってるの？」というご質問についてですが、実は廃炉に特化してしっかり仕事ができるといった意識、マインドセクトっていうんですか、そういった意識ができた。いま、カンパニーが成り立って、ほんとに廃炉だけを考えながら仕事してくれる人間が東京電力の中に生まれ、ようやく半年が過ぎたとお考えいただければいちばんありがたいと思います。

吉田悦花

はい、ありがとうございます。その廃炉推進カンパニーの体制について、ちょっとまた違う形で吉岡さんからお話をうかがいたいのですが。

ここにたいへん重い報告書『中間・最終報告書』というのがありますが、この編集に携わった吉岡さんの現場を知るご経験から、福島第一廃炉推進カンパニーの体制をどのように評価されているのか聞かせてください。

吉岡 斉

はい、私も大筋では福島原発行動隊と同じ意見です。お金の方は東電が借入れ、ま、将来潰れるとしても潰れるまでは出していただきたい、そういうことを前提に、政府が独立組織としてそういうものを作った方がいいんじゃないのかと思っ

ております。理由っていうのはやっぱり、よく言いますけど原発は国策民営だというような、政府ががんじがらめに監督をして、実際に動かすのは電力会社というような形で、両者の責任関係とかそういうのがやっぱりあいまいになっている。

東電は確かに原発を運転して、収益を挙げるとこういうことの専門性は極めて高いわけです。しかし、いざ何かが起きたときのオペレーションとか作戦を、高度な管理、マネージメントを必要とするエンジニアリング作業みたいな作戦をやるのは、そんなに得意じゃないんじゃないか。言ってみれば、農耕型の作業は得意だけれども、いまは戦争に近いような、福島第一はいままさにそういう状況だと思うんです。

私も全面マスクの特殊防護服を着て、こりゃすごいというふうに事故調やってるときには思いました。2時間でへとへとになって、それを毎日何千人の人が働いているという戦争に近い状況、こういうことを指揮をして動かすというのは果たして東電に向いてるのだろうか。そうじゃないんじゃないだろうかとは実は思っています。ですから、東電とは別組織として独立の廃炉組織をつくって、そこで一段落するまで持って行ったら、あとは政府の廃炉機構に引き渡すと。

廃炉機構というのは何百年の単位、何千年の単位で廃棄物を扱っていかなくちゃいけないので、そういうものを電力会社がやるというのは難しい。福島第一の後始末する以上にたいへんな作業ですので、それは超長期的な戦略で国がやるという仕組みに変えていかなくちゃいかんし、そこまでの移行過程においても東電とは別会社を作るべきでしょうね。

いまは、政府のいろんな役所が、マイクロマネージメントとか、増田さんは苦勞する立場に置かれて、ここに行けば「お前どうしろ」とか言



われ続けてるように推定するんですけども、違ったらお許しください。そういうものではなくて、自分たちの能力、裁量、決断に基づいていくような組織、そのためには独立が必要だというふうに思っています。

**福島原発
行動隊の
シニアの
有効活用**

吉田悦花

はい、ありがとうございます。先ほどから挙手をされていますので、名嘉さんにお話をいただきますね。

名嘉幸照

まずですね、岸井先生がおっしゃったように、情報開示が十分にされていないということに、私も同感です。特に環境省が地元で発表するいろんな数字がありますが、実に誠意がないです。

それと先ほど、増田さんが現場の作業員たちに感謝の気持ちを述べておられましたが、私も非常にうれしく思っています。原発事故以来ですね、どういう人たちが福島第一に携わったか、ちょっと触れてみたいと思います。報道されていますように、重要免震棟というのはかなり多くなりました。柏崎の中越地震を経験して、第一原発で作ったのが免震棟ですが、そこで東京電力の社員はもちろん、我々協力会社も一緒にやったわけです。その後、いろんな状況においても、ほとんどが地元出身の人たちが担ってきました。多いときには75%地元出身です。いまから1年半前、東京電力の発表では62%いて、今年になってやっと50%を切れた。どうしてこれだけの地元の若い人があの苛酷な現場にいたのかといえば、彼らは原発事故を収束させたい、地元を取り戻したいという気持ちからであり、東京電力のためではありませんでした。そういう苛酷な状況の中、いま、増田さんから作業員に対する感謝の気持ち聞いて、少し安心しました。以上です。

吉田悦花

ありがとうございます。名嘉さん、私の方から質問よろしいですか。名嘉さんは、東北エンタープライズという協力企業の経営者ですが、先ほど東京電力さんは福島原発行動隊の雇用は無理と

おっしゃられましたが、名嘉さんの会社ではいかがでしょうか。

名嘉幸照

これは私の解釈というだけじゃなくて、先ほど言ったように、要するにシニアといってもそれぞれ体力やいろんな健康の面でも個人差がある。で、先ほど甲種合格という例で話しましたように、それぞれの分野に適するシニアが必ずいるはずで。そういうシニアがいたら、我々下請け企業ですから、そういう人たちの力をいつでも借りようと思っています。廃炉という事業は長丁場ですから、いま、東京電力は充分人材は足りているというお返事ですけども、私は必ず皆さんの力が必要となるときが来ると思います。毎年シニアって出て来るんです。廃炉事業が10年20年30年経つとすれば、こういう人材を活用しないと非常にもったいないと思います。そういう人材がいまいたら、我々地元の企業としては、積極的に検討したいと思います。

吉田悦花

ありがとうございます。いまのお話を受けてもう一度増田さんにうかがいたいのですが、廃炉推進カンパニーになったので、もう一度増田さんのご判断で外注先を見直すことは無理ですか？

増田尚宏

外注先としての福島原発行動隊の採用は、申し訳ありませんが、あり得ません。

これは何回聞かれてもないです。先ほど申し上げたように、放射線管理ができたり品質保証ができたり、しっかりと部署を作ってですね、そういったことができないと責任を持った仕事を頼むわけにはいきませんし、我々としても何かあったときには「あの人たちが悪いんです」なんていうことは絶対言えるわけないですから。我々も責任持って、常に東京電力がしっかりと責任を持つ必要があります。

ただ、我々もですね、人がいなくて困るっていうのは、名嘉さんもおっしゃった通りで何をしているかという、各元請けさんに3年先ぐらいまでの我々が発注する仕事の内容をみんな見てい

ただいています。一般的には競争発注ということで、いろんな仕事があったら、皆さんからお金を提示してもらって、安いところに発注とかいうやり方でいろいろやりますけども、我々はいま、それをやっていません。福島第一の現場というのはやはり技術的にも難しいところもありますし、皆さんにしっかり安定して、そうした計画を立ててもらい、あるいはその仕事に必要な雇用を継続してもらうためには、随意契約という言葉を使ったり、特例発注という言葉を使ったりしていますけれども、色々な契約手法を採用しています。

「あなたの会社にこれだけの仕事を3年に渡ってお願いします」と。「ですからその中で、人をずっと抱えてください」、あるいは「人を教育してください」、あるいは「高線量の仕事と低線量の仕事を一緒に提供しますので、その中で人をローテーションしてください」ってことまでやっています。まあこれも廃炉推進カンパニーになって始めたところなので、まだあんまりかっこいいことも言えないですが、これやることで企業さんも先行きが見通せますし、作業員の確保とか事務所を建てるとかそういう計画もやりやすくなっていると思います。

また働く人も、いつ首になるかわからん・・・首って言う言葉あんまり使っちゃ駄目なんですかね・・・仕事をやめろって言われるかわからないってところがあると不安になりますし、そんな安心して働けない現場だったら、誰でも嫌だっと思います。そういった意味での、安定した職場にする努力を我々はやっています。ぜひ、その中に入っていていただくか、あるいは先ほど申し上げたようにエールを送っていただく立場についていただきたいというのが一つあります。

もう一つが、これから東京オリンピックの建設作業等が始まると、人手不足になると思います。特に建設業界っていうのは、もうすでに人手不足だっというふうに言われています。その中で福島第一としても、やはり魅力的な仕事場として来てもらう必要があります。そのためにはいま言ったような長期の雇用を続けるとか、あるいは福島第一の中で働くとか怪我しそうだとか、全面マスクしてるから危ないっていうイメージは確かにあると思うんですね。ですから、それでも安心して

働いていただいて、普通の作業現場よりけがが少ないっていう状況を作らないことには、皆さんに安心して働いていただけませんので、そういった状況を作ろうということで、いま、現場の環境改善ということにも取り組んでいます。そうした取り組みも行っているということも、ご理解いただいた上で、福島原発行動隊の方にはやっぱり親という立場として支援していただくのがいいかなと思っています。

吉田悦花

では、岡本さんに、増田さんのお話に対するコメントをお願いします。

岡本達思

「親としての立場」というように言われていますが、実は私はまだ若いんです、はい。それと今日、どうしてもこういう話し合いになりますと、増田さんがつるし上げられちゃうような感じになっちゃう。そういうのは、私も好んでいません。ほんとに同じ志の中で、この福島第一原発の事故収束ということでの気持ちは同じだと思っています。そういう中で、一つ説明させていただきたいのが、福島原発行動隊の中にもいろんな考えがあるんですね。

その例として、現状では東電さんの元で仕事をやりたいということで、確かに汚染水の見回り、タンクの見回り隊であるとか、そういう仕事の要求をしたこともございます。ただしもう一方で、先ほども言っているように、国家プロジェクトの中で現在のような多重下請けの中に入るということの問題点、意思疎通等の問題ではいろんな課題がありまして、国を挙げての事業ということを目指すべきだという考え方も持っております。

私はどちらかと言いますと、個人的に経験を積みたいということで、東電に直接ではなく、いろんな下請企業への就職アプローチもしていますけれど、やはり基本としては国家プロジェクトのある部分を担いたいと、そういう仕組みの中で自分の仕事を担ってい



きたいという気持ちです。

あともう一つ、仕事というどうしてもハードな部分に目が行きがちなんですね。例えば、ほんとに全面防護マスクという、そういうようなイメージでありますけども。これは増田さんがいちばんよくご存じだと思うのですが、7,000人の皆さんの全てがそのような仕事をしてるわけではないと思うんですね。いろんな仕事はあるはずですよ。もっと言うならば今後、国家プロジェクトというような、より全面的な仕事になった場合には、多角的なイメージ、創造力などが必要になってくるんじゃないかなと思います。そのときには、単に技術とかそういうようなことだけじゃなくて、もっとソフトな面であるとか、開発能力であるとか、企画力であるとか、そうした力を持っている人間なんかも必要になってくるのではないかなと思っています。そういうところでもシニアは役立てられるのではないかなと私は思っているんですが。

他の被災地とは違う 福島の 未解決な問題

吉田悦花

はい、ありがとうございます。ちょっとシニア、シニアという言葉が飛び交って、えりのあさんが首をかしげてらっしゃるんで、若い世代としていままでいろんなお話についてどんなこと思われたか、一言、印象をお聞かせできますでしょうか。

えりのあ

はい、若い世代の代表という立場でお話をしますと、いまのシニアの方たちがほんとに、おじいちゃんというイメージでなくて若いんですよ。私もいま、障害関係とか高齢者関係の現場で、自分の父親くらいの方と働いてるんですが、私たちよりもほんとにパワーがあるんですね。ほんとにシニアの活用って、すごく必要な部分だと思います。まだまだいろいろなところで人材的には足りていない部分があるんじゃないかという感じもしていますので、シニアの方々に活躍してもらいたいですね。

先週も、一週間前は宮城県石巻の方に支援活動に行ってきたんですけども、福島とは復興の違い



がすごく感じました。最初のころはどこも津波とか、原発問題とかすごく、どこも被害が大きくて同じようなレベルだったんですけども、一週間前の宮城県の方は新しいおうちが建っていて、また戻ってきて住み始めるとかっていう復興の姿

がうかがえるんですね。でも、自分の故郷の双葉町は、役場はいわき市にありますけども、こっこの戻って感じたことはまだまだ同級生とか地域のみんなが仮設に住んでいて、それこそ原発問題の話も解決できていないわけです。

宮城に行っても岩手に行ってもそうなんですけども、原発問題は出てこないんですよ。私はいま、栃木県の北の方に住んでますけども、そこに住んでいても原発の話って出てこなくて、話題にならないんです。みんな一人ひとりが、住民一人ひとりが、もっと前向きに原発問題を受け止める気持ちを持った方がいいんじゃないかなっていう感じがしています。

このシンポジウムも、まさにそういう会だと思うんですね。でも、やっぱり若い方が少なくてシニアの方が多いいっていうのは現実なんですけども、私みたいな世代の方たちにももっともって発信していきたいっていう気持ちがあります。だからこそ先ほどのような話の中で、一人ひとりが責任を取るとか、東電が責任を取るとかじゃなくて、もう国レベルとか世界レベルで考えてみんなで動いていかないといけないんじゃないかなって、私は感じています。

吉田悦花

素晴らしい！なんか、まとめに入ってるような感じですね。まだまだ議論は続くのですが、休憩前にもう一言だけどなたか…。あ、岸井さん、目が合いましたね。

岸井成格

さっきねえ、名嘉さんから、環境省の話が出ましたけどね、私はたまたま巡り合わせで環境省の名付け親になったんでいろんな縁があるんですけど

ども、役所っていうのは縦割り行政、いちばんの弊害なんですよね。だからさっきの高木さんなんかの人事もいろんなことが絡んで、ああいうことになってるんです。環境省は担当大臣が「金目」って言ったでしょ、最後は。あの感覚がよく表れてる。環境省は「なんで我々が原発を担当しなきゃいけないの」っていうねえ、「本来の俺たちの仕事じゃないよ」っていうのがあるんですよ、感覚的に。だからそれをみんなわざわざそうやって、なんて言うのかな、やらせてるところにちょっと無理があるんですよ。だけど担当である以上はきちっとやるべきことはやってもらわなきゃいけないなって私も思ってるんです。そこがね、やっぱりメディアにとっても不信感があるところなんですよねー。

吉田悦花

ほかに皆さん、よろしいですか。吉岡さん、はい。

吉岡 斉

まあ若干時間があるそうですので、資料のお話を30秒で終わらせますね。『福島原発の収束・廃炉を考える』、こういうものすごい細かい字で書いてあるたいへんな資料ですけども、一応、私たちの脱原子力政策大綱の関連部分をぬきだして来ましたので、ぜひ読んでください。これを読むよりも、コンピューター使える方はウェブサイト「原子力市民委員会」って、ぽんとやると出て来る、Googleにも出てきますので。かなり多くの点で、行動隊と近いようなことを言っていて、たまたま意見が一致するのではなくて、やはりある種の必然性があるんだろうなというふうに思います。

それと、単なる補足ですけども、環境省もそうですが、本来原子力規制委員会が安全確保に一元的な責任を持つというふうに法律で書いてるわけですけども、オブザーバー的な役割しかしていない。実際動かしているのは、経産省のような、そういうような感じで。それは昔の原子力安全委員会と同じなんじゃないだろうかという。この辺ももうちょっと主体的に関与して、そちらをむしろ中心にして国家的な組織を、構築するというのがいいんじゃないかと思ってます。

現場で働く
人たちの
被曝管理に
ついて

吉田悦花

はい、ありがとうございます。では、最後ですが岡本さんから一言お願いします。

岡本達思

はい、被ばくの管理の問題についてですが、いま、日本では被ばくの一元管理はできてないんですよ。事業所内では体系上はできてるんですけども、事業所を移動した場合は、それが見えなくなってしまうという構造がいまもあるわけです。で、事業所を渡り歩いている人たちが、どこまで被ばくの管理ができているかについては疑問なんです。個人が管理するっていうことと、いま働いてる、職場が管理する、その職場のある地域の労働基準監督署が管理してるというようなところで、誤差が生じてしまう。私がどうしても国家プロジェクトにこだわるのは、そういうような部分を一元的にきちっと管理していくというとか、そういうようなことも必要だと考えるからです。

教育であるとか経験とか履歴とかそういったものを一元的に管理していく、そういうような情報をきちっと一本に絞っていくという中で、このたいへんな作業をしていかなければいけないという意味で言ってるんですね。これは増田さんに要求しても筋違いの話ですが、私はこういう働きかけを吉岡先生なんかと一緒にしていかなければいけないのかなとは思ってます。

いま、私自身はハローワークの方で就活していますが、ことごとくはねられています。年齢制限だったりいろんな条件があるんですけども、働く意志とかそういうものがありながら実際にははねられている。内閣府に言うと、「年齢制限はしてない」というような答えが返ってくる。現場と国のトップの、そうした誤差みたいなものが、いろんな問題を含んでいるのではないかなという思いはしています。

吉田悦花

あ、はい、どうぞ、増田さん。

増田尚宏

すません、いま、岡本さんの話に対して一言だ

け。被ばくについてですね、職場を渡り歩いて、中央登録センターっていう全体の組織がありますので、全体の被ばく集積できています。そこだけは、誤解なきようによろしくをお願いします。

それと、吉岡先生が仰った、国がやった方がいいだろうということについては、私は残念ながらそうは思っていないくて、国がやるともっと建前になってしまって、ほんとに福島第一を廃炉に結びつけて行くには、やはり事故を起こした当事者の東京電力がしっかり責任を持っていくしかないというふうに思ってます。

確かにお金の出所っていう意味ではあるかもしれませんが、やっぱり自分たちの責任でやるっていうのは大事だと思っています。自分たちがいちばんこの中をわかっているんで、やっぱり福島第一は東京電力が責任を持って処理するっていうのが大事だと思っています。

吉田悦花

力強いお言葉いただきました。ありがとうございます。それでは時間も参りましたので、ここで10分間程の休憩を取りたいと思います。どうもお疲れ様です。

青田いずみ

ただいまより10分間の休憩をいただきたいと

思います。先ほど話しましたように、質問がございました方は質問票に書いていただきまして、受付のスタッフまでお渡しくださいませ。それでは後半は10分後に開始いたします。よろしいいたします。

<休憩>



会場からの 質問に 答え

青田いずみ

皆様、お戻りになっていらっしゃると思いますでしょうか。それではよろしければ後半のシンポジウム始めさせていただきます。

まず最初に、先ほど皆様からたくさんの質問票をいただきました。その中のいくつかをご紹介しますが、ほんとにいっぱいありますので、全てのご質問のお答えすることはできません。その辺、ご了承いただきたいと思います。

まずですね、これは吉岡さんと増田さんにお聞きします。「汚染水対策やその後の廃炉にしても、いまとは違う別の様々な技術的オプションが専門家から出されています。例えばですね、水を使わない鉛投入法などとか、こういうことなどをどのようにお考えですか」という質問です。吉岡さんから、よろしいでしょうか。一言をお願いします。

吉岡 斉

多くの提案が出てますけれども、どれがサイエンスフィクション的で、どれが現実的かというのは、にわかに判断つきがたいケースもあって、判断に迷うところです。私は物理はやりましたけどいろんな分野のどことか、そういうようなところに長じているわけではないので判断しにくいんだけど、いまの福島第一原発のデブリの状況がどうなっているかということ自体の確証がない。かなり冷えてはいると思うんですがね、例えば空冷化が直ちにできるかというのはわかりません。水がなくなってもシューシュー言い出さないくらいには冷えていてと想定しますが、そうだとすれば鉛投入法というはちょっと違うんじゃないだろうかと思います。

青田いずみ

増田さんはいまの質問に対していかがでしょうか。

増田尚宏

なかなか難しい問題です。東京電力は原子力発電については、まあそれなりにこんなふうになるかなとかイメージできるんですが、いまの福島第一の状況や、これからどうなるかといったイメー

ジはできないと思います。未経験の世界に入っていますので、この世界の英知っていうものを、我々はいろんな人の意見を聞きながらやっていく必要があると思っています。そういった意味では先ほど岸井さんや吉岡先生が仰ったような、東京電力だけではだめじゃないかということはあると思っています。

いま、国の方で廃炉と賠償を支援する機構というのを作っていただいて、そこで重点的な課題は有識者、あるいは世界中の人の意見を聞きながらしっかりと決めていこうというような体制ができました。一步前に国が出てきてくれるような。その中で決めていくことになるわけですし、決して我々だけが工程とかを見て決めていくんじゃないで、もっと謙虚になって何が本当にいいのか、しっかりと立ち止まって考えて議論する必要があると思っています。

繰り返しになりますけど、作業をやっていただく方の被ばくを増やさないと、安全を守りながらというの、その大きな判断基準として入れながらやっていく必要があると思っています。

青田いずみ

ありがとうございます。続きまして、また増田さんにお聞きします。「東京電力は2016年4月をめどにホールディングカンパニー制に移行していくと発表されています。その計画図では3つの分社ができますが、いまの廃炉推進カンパニーの将来の位置や姿がはっきりしていません。いつごろまでにそのことがはっきり固まるとお考えですか」

増田尚宏

はい、先ほどちょっと触れたところもあると思うんですが、3つのカンパニーっていうのは、「発電するところ」「配電・送電をするところ」「電気を売って集金をさせていただく」という3つの会社ができます。で、私の廃炉推進カンパニーは、先ほど申し上げたようにお金を稼いでいませんので、ホールディングスという本社組織の中に入ります。そして、他の会社で稼いでいただいた金をつぎ込みながら福島第一を安定させると。我々は1,200人の人間がいると申し上げましたけれど

も、そのうちの1,000人が福島第一の現場にいるんですね。例えば、東京電力はダムもやっていますし、いろんなところでいろんな建物も建てています。そういった部門の技術者の知恵を使う必要もありますので、そういった人を本社側からしっかりつぎ込んでもらえるようにしないとダメですね。我々廃炉推進カンパニーだけで孤立してしまうとまずいと思いますので、ずっとこの本社組織の中にいてですね、仕事を続けるということです。他のところで稼いでいただいたお金を使っていくという形をとっていくことになると思います。



青田いづみ

はい、ありがとうございます。続きまして、2枚の質問票なんですがちょっと似たような内容なので、おふたりの内容を同時に読み上げさせていただきます。名嘉さんと増田さんに対しての質問票ということになっております。

「ゼネコンメーカーを頂点とする下請け体制はピンハネ体制と理解しています。この体制をなんとかできないものでしょうか。せめて7次を3次程度に」

「作業員の被ばくは現在完全にコントロールできているとお話ですが、度々メディアに上る作業員の告発、例えば線量計の管理のずさんさなどはどのようになっているのですか？ 多重下請けの人の話ならば、その構造はどうしたらなくなっていくとお考えなんですか。」

それでは名嘉さんからお応えをお願いしてよろしいでしょうか。

名嘉幸照

いまの質問ですが、事故が起こった当初からいろいろ取り上げられている問題ですね。現場の仕事の発注は、基本的には東京電力から各メーカー、ゼネコンさん、協力業者という方向で流れてきますが、私ども地元の下請けも直接東京電力から発注を受けることもあります。その中でやっぱり被ばくの問題は深刻ですね。いま言ったように、一定の技術がある作業員、要するに原子力の放射線

管理区域で働いてきた経験のある方々と、全く原発で仕事するのが初めてという方々が来るわけです。先ほど増田さんが言ったように5,000人から6,000人が来ますので、その請け負い体制が非常に複雑です。従って、労働基準監督署も監督はしているんですけど、その目をくぐっているいろんな会社がある形で入り込んでいるので、一人ひとりの作業員たちにまで目が届かない。彼らも非常に置きざりにされた思いや、やるせない思いをする、これはずっとありました。

おそらく、いまでもあつた問題はあります。もう限度になったから終わり、と首切られることも地元の作業員からよく聞きました。これは今後、政府も東京電力も、もっと真剣に考えなくちゃいけない問題だと思います。現場ではコントロールされているというんですけど、実態はまだ十分でないということ、私の方から申し上げたいと思います。以上です。

青田いづみ

ありがとうございます。それでは増田さんもよろしくをお願いします。

増田尚宏

はい、ゼネコン、メーカーさんの下に、確かに下請け体制があります。これは、日本の産業の一つの形で、ずっと戦後からこの体制が続いているというふうに聞いてます。皆さんの方が私よりも遙かに詳しいと思うんですが、ゼネコンさん、メーカーさんといえども全部が全部、専門的に技術を持っているわけではありません。例えば、特にゼネコンさんは放射線に関しての専門家なんていうのはいままでいないわけですから、放射線に関するところは下請けに頼んでそこに管理してもらうとか、あるいは足場を組むところの管理、型枠工さんは型枠工さんと、餅は餅屋のなところがありますので、どうしても体制としては多層化をしていくという状況になっています。

で、多層化が悪いかっていうと、私はいまはそうは思っていない。どちらかというと、現場で働いていただいている第一線の人たちが、第3次であり第4次でありということはあるかもしれませんが、その方々が我々東京電力の思いをわかっ

で働いていただいているか、あるいは原子力の安全とはどういうことか分かって働いていただいているか、あるいは逆に、働いている人がなんか困っていることがあったら、それを我々に伝えてもらって我々がしっかり改善していくとか、そこが大事だと思います。

私が福島第一で働く社員に言っているのは、ちゃんと現場に出て現場に密着して、現場をグリップしてくれと。それで、作業している人としてしっかり話をしてくれっていうことも伝えながら仕事をしております。それがいまいちばん大事なことだと思っています。多層化の問題よりも、そちらでしっかりと、まずは実をとっていききたいと思います。

多層化に関しては、確かにピンハネという話は昔からあるんだと思います。請負構造の中で実際にいくらのお金が4次5次の人の手元に渡っているのかっていうのは、なかなかわからないっていうことは皆さんもいままでの仕事の経験であるんじゃないかと思います。その中でも作業をしている方にお金が渡っていることをしっかり確認してくださいといったことも、元請けさんにいま、お願いをしているところです。元請けさんにその仕組みを作っていただいたり、実際に確認してくださいという要請もしております。そういった形で、まずは確認したいと思っています。

それともう一つは、さきほど名嘉さんからもありましたけども、いろんな会社が作業員を置き去りにしているところがあるんだと思います。そういったことが起こらないように作業をやっている人たちに、我々だけじゃなくて労働基準監督署なんかもやっていただいているんですが、「雇用体制ができてないとおかしいですよ」とか、「あなたに指示命令をする人とお金を払う人が同じじゃないとおかしいですよ」とかいうような教育もやってもらっています。そういった形で両面から、自分たちで身を守る、あるいは東京電力の方からしっかり見る、元請けさんから見てもらう、そういったいろんな形でですね、体制あるいはいまの作業の環境というのを変えていこうとしているところでございます。こうしたことがしっかりできるようになればですね、もっとも現場に密着した形で仕事ができるようになると

思うんですが、いまは「何次だからいい」とか「何次だから悪い」という言い方は、私は現場ではしていません。

青田いずみ

ありがとうございました。このほかにもいろいろな質問をいただいておりますが、シンポジウムの課題も満載しておりますので、とりあえず質疑応答はここまでにさせていただきたいと思います。

原発事故を契機に生じている様々な問題

吉田悦花

ありがとうございました。皆さん、質問、たくさんありがとうございました。

それでは次のテーマに入らせていただきたいと思います。これから小一時間程、皆さんと一緒にこの場を続けて行きたいと思いますが、ここで私から一つの文章をご紹介しますいただきたいと思います。

これは吉川彰浩さんという方がブログに発表なさったものなんです。この吉川さんという方は、東電学園高等部を1999年にご卒業後、東京電力に就職されました。2012年6月に退職なさるまで福島



第一、福島第二に勤務された方です。退職された原因は、福島第一の現場で働く作業員や東京電力社員の実情を広く世の中に知らせて理解してもらいたいとお考えになったからだそうです。

「Appreciate FUKUSHIMA Workers」、日本語に訳せば「福島で働く人たちのことをもっと理解してもらいたい」「評価してもらいたい」というふうに訳せるでしょうか。そういう名前の団体を設定なさって、作業員の食糧状況の改善などをはじめとした活動をされているということです。ご自身も、家族とご一緒に避難生活を送っているという吉川彰浩さんの文章を、青田さんに朗読をお願いしたいと思います。では、一緒に聞いてください。

青田いずみ

(代読)

私の知識、経験で、いまやなくてははいけないのは福島原発をいかに安定、安全に廃炉にするかに協力することです。そのために作業員の方々、それに関連する東電社員を守らなくてははいけません。優先順位は、目の前にある危機への対処ではないでしょうか。

世界でいちばん危険で不安定な原発が福島にある。そしてそれが満足にコントロールできておらず、かつ、廃炉を進める作業員の生活環境改善、労働環境改善すら遅れている状態。そのことに関して社会的に支えていこうという基盤すらできあがっていない。

負の遺産として、次世代に託さないといけなのです。福島原発を、安定安全に廃炉にしなくては、皆さんの子どもたちはどうなりますか？ 最悪なケースは想像できるはずですが。単純にこのままでは、劣悪な環境のまま作業員の方々に仕事をさせることにもなりかねません。

将来、皆さんの子ども、孫が現地で作業することになったとき、いまのような状況で作業させたいのでしょうか。決して、他人事ではないのです。福島原発で作業される方々が抱える問題は、私たちに振り返る問題であるということです。単純に、苦しんでいる人を助ける、それは、人間が人間である美德ではありませんか？ 「それは、東電・政府が考えるんだ」当たり前の正論です。ですが、私たちは任せきりにしていませんか？ 自分の生活すら見直さず、弱者を食い物にしているこの社会の現実から、目を背けてはいないのでしょうか。

皆さんのできる範囲、余力の中でお願いできませんか。結果が出ない毎日の中、がんばっている人たちに思いを馳せてみませんか。前に進むため、皆で手を取り合い、協力してみませんか。必要以上の根拠のないバッシング、人権侵害はやめてみませんか。

私は、東京電力をやめることで、外から改善することになりました。できることは小さいです。でも、次世代へつなぐ種は蒔かないといけません。それに水を与えてくれるのは、誰でもない、皆さんです。10年後、20年後、「あのとき何をしていたの」きっと、お子さんやお孫さんに聞かれるときが来るはずですが。

胸を張れる、答えを目指していきませんか。

吉田悦花

ありがとうございました。たいへん重いメッセージなんですけども、皆さんはどのように受け止められたのでしょうか。「胸を張れる答えを目指していきませんか」という問いかけでしたけども、えりのあさんにちょっとうかがいたいんですが、いまのメッセージをどのように受け止められたか？

えりのあ

そうですね、実際に、いまお話を聞いてみて、私の同級生たちも被災地で旦那さんが働いてて、私くらいの世代っていうと小さい子がいるので離ればなれで暮らしてる家族が多いんですね。旦那さんは被災地で働かなくちゃいけない、東電のお仕事があったりとか。私たちの世代は小さい子どもがいるからっていうことで、今後どうするんだという問題がすごく話題に上がっています。

その中で家族が分裂している子も多くて、ほんとに離婚問題とかも身近な問題なんです。実際、離婚されてる方もほんとに多くて、震災の後に。私もみんな会いに行くたびに、先月もまた離婚の話があったんですけども、とても深刻に受け止めています。被災地では、避難所っていうか仮設住宅に慣れなくてたいへんでも、「福島の人間だからお金もらってんだから働かなくていいだろう」とか、バッシングも実際にあったりとか、心の面ですごく傷ついてる方が多いんですね。だから作

**Appreciate
FUKUSHIMA
Workers**

[わたしたちについて](#) [取り組み](#) [お知らせ](#) [メディア](#) [寄付](#) [問い合わせ](#)



次世代に託せる“ふるさと”を描こう

アプシエイト フクシマ ワークスは、次世代に託せる“ふるさと”を描くために3つの取り組みを行っています



福島原発への正しい理解促進

「活動記録は画像をクリック」
福島県民生活の復興には一日も早い福島第一原発の収束が必要です。作業員の方々の労働環境、生活環境改善の為「講演会」「現地ガイド」「物資支援による応援」を行っています。



次世代に託せる地域づくり

「活動記録は画像をクリック」
次世代に繋げる産業を作っています。広野町オリーブプロジェクトを通じ、住民主導の地域復興に取り組んでいます。



次世代と向き合う場の創出

「活動記録は画像をクリック」
次世代を育む活動を行っています。広野町中学生支援を学生団体AODと一緒に創りあげていきます。

業員の方の問題もそうですが、真剣に考えなければいけない問題が山積みなんです。

私は、小学生のころから障害児関係の支援をしてるんですけども、震災の直後も障害のある子どもたちが避難所にいることによって、奇声を発すれば「うるさいから出て行け」とか言われ、車の中にいなさやいけないとか、居場所がなくてほんとにつらい思いをしています。

私の双葉の友達も二人とも障害児なんですけども、やっぱりそういう辛い思いをしています。その子も離婚されてしまったんですけども、やっぱりいま、子どもと仮設に住むことができてなくて施設に預けてるんですね。旦那さんとは別れ、子どもとも別れてとか、そういう問題の相談がすごく多くいただきます。

先ほどから原発の収束問題とか廃炉問題は国レベル、世界レベルで対応していかなきゃいけないということもあるんですが、私なんかは原発の専門家ではありませんが、ほんとに身近なところから声を聞くとか、まだまだまだまだ地域レベルでの活動も必要だと思います。先週行った宮城でもそうですし、福島も仮設もいま 11 施設あるんですけども、その中でも仮設同士が分裂したりしているんですね。そっちの仮設とは全然コミュニケーションがとれていないとか。

先週行った宮城のときも、ほんとに目の前の仮設なんですけども、こちらでいろんな催しものや炊き出ししてても、「そっちの仮設だから行かない」とか、ほんとにコミュニティが崩壊しつつあるように思います。

これから先ほんとに収束ができることを願うんですけども、何年か先、何十年か先っていう中で「双葉町に戻れるよ」ってなったときに、その双葉町のいまの今まであった家には住むことはできないですね。それを見越していまからコミュニティが崩壊しないように人びとの絆をつないでいくことが必要なのではなんじゃないかな、って思うんですね。

だから、そういう双葉町だけのことじゃなくて、ほんとに地域のみんな、それこそ栃木県にも避難されている方がたくさんいて、雇用の問題とかたくさんいろんな問題があるんですけども、そういうさまざまな問題をコミュニティの中で、皆

さんが連絡を取り合い声をかけ合って解決していかなくてはならないんじゃないかなって思います。

吉田悦花

ありがとうございます。ほんとに現場ならではの心の面のケアも含めて必要ではないかというお話でした。そして吉川さんのメッセージに戻りますが、やはり東電の社員の皆さんとか、協力企業の皆さん、現場の作業員全ての皆さんをフォローなさっているんだなということをつくづく思うわけですが、作業員の人数のことや被ばくのこと、熟練工についてとか人材育成のことなど、色々テーマがあるということを学んできたかなと思います。いま一度、名嘉さんにうかがいたいんですが、いまの吉川さんのメッセージについて率直なご意見ご感想をいただけたらと思います。

名嘉幸照

非常に真剣に考えていらっしゃるメッセージなので、すごく胸に響きました。私も一応避難民で、月 10 万の補償金を東京電力からいただけてます。それから、帰宅困難区域にある住宅の補償も、これからは出してくれると思います。まあ、もろもろの補償金が入りました。先ほど岸井先生が仰った、ある大臣の「金目でしょ」って言葉ではありませんが、確かに金目が手に入りました。しかし、いま、仮設にいるじいちゃん、ばあちゃん、それから家族ばらばらになっている子どもたち、家庭内不和やコミュニティの崩壊も心配されます。

その中では、やっぱりいつまでも原発事故の話ばかりしていられないっていう空気はあります。ま、福島県も同じ。国民にもマスコミの皆さんにも、やっぱり未来がある東京に向けて明るい話をしよう、そういう雰囲気があることはわかります。でも皆さん、これだけの未曾有の大震災、地震、津波、あつてはらない原発事故、これは福島県だけに押し付けていいものじゃありません。みんなで考えましょう。

私から高校生のメッセージを、ちょっと読んでみたいと思います。これは震災のあった 2011 年 3 月 11 日から 5 ヶ月経った 8 月、福島県会津若松市で全国総合高校文化祭というのがありまし

た。そこで高校生たちが、構成劇『福島からのメッセージ』を披露しました。その主人公が語るセリフです。

「福島に生まれて、福島で育って、福島で働いて、福島で結婚して、福島で子供を産んで、福島で子どもを育て、福島で孫を愛で、福島でひ孫を見る。福島で最期を過ごす、それが私の夢なんです。あなたが福島を大切に、大好きになってくれれば幸せです」

この高校生のこのメッセージを、私の気持ちとして皆さんにお送りします。ありがとうございます。

吉田悦花

ありがとうございます。吉岡さんにも吉川さんの思いについて、感想をお願いします。

吉岡 斉

吉川さんのメッセージは当然のことを言ってるし、感銘を受けます。事故から3年半経ったのに、いっこうに避難してる人はまだ12万人台で、制限区域から避難している人だけでも10万人を超えているという。やはり原発の事故というのは、他とは全然規模が違うものなのだというのは予想していましたが、改めていまその影響の大きさに驚いています。10年後はどうなった、20年後はどうなったと、まあ政府事故調の内部でもそういう議論しながら色々なところを見て回ったり、多くの市町村を見て回りました。そこで、やっぱり議論になるのはいまのような話でした。

それを抽象的な言葉で言うならば「人間の復興」という・・・これは私たち原子力市民委員会が発明した言葉なんですけども、元の土地が蘇って、元の土地に元のコミュニティが生まれてという、再建されて経済が発展してというのは多分無理なんじゃないだろうかと。そうではなくて、そこにいた人びとに対して、いろんな境遇にならざるを得ない場合があると思うんですけども、それぞれにおいて救われるという、そういう仕組みを作ることができるのではないかな、あるいは作るように政策を作ればいいんじゃないか。

しかし、残念ながらいまの福島に関する政策はそのような方向にはなっていないように思いま

す。それを作っていくというのが、私自身も一つの課題だと思っていますし、提案はしていかなくちゃいけないと。積極的に提案をするということが、大事だと思います。で、若干関連しますけども、増田

さんが先ほど東電に任せなきゃ駄目だという風なご意見を述べられました。これは、ある種正解で、私も心の中でも半分はそう思っています。なぜなら、公社公団方式というのは、ナショナルプロジェクトというのはなかなかうまくいかない。結局、下の方に丸投げしてというように。東電に一括丸投げして、というのは失礼な言い方だけど、そちらの方がまだましなんじゃないかというように思います。

しかし反面、多重下請け方式というのは、かなり前近代的な仕組みで、これもまただめなんですね。どちらもいいとは言いがたい。どちらもいいとは言えないという問題があるわけで、未曾有の福島原発事故を前にして、私たちは悩みに悩むところにいるわけです。だからその中で少しでもどちらかを取るというのではなく、直ちにどちらかを取るのではなくて、うまく組み合わせて仕組みを変えていくという、こう言うことに私たちは努力すべきではないかと、私は考えています。



東京電力社員だからその辛い思いも体験

吉田悦花

はい、ありがとうございます。いまのご発言に対して、増田さん受けていただいて良いでしょうか。

増田尚宏

すみません、いまの発言に対する応えの前に吉川さんの感想を述べさせていただきますね。

吉川さんには私が退職辞令をお渡ししましたが、いま、話を聞きながらそのときの顔を思い浮かべていたんです。当時は、そのころの雰囲気、周りからも「東電なんかやめたら」って言われてやめる人がいたりしまして。そういうときは、私は

「もう少しちゃんと考えろよ」って止めたりしていましたが、彼は普段からしっかりものを考えて発言する人間だったので、辞めると言ってきたときもしっかり意志を感じたので、だったら彼は大丈夫かなって思い辞令を渡しました。ほんとにいま、良い活動をしていただいてると思います。ありがたいと思います。

で、えりのあさんの言葉の中にあつたバッシングについてですが、私はえりのあさんの言ったバッシングとはちょっと受け止め方が違ったんですが、東京電力の人間に対するバッシングも実はかなりあると思っています。

東電の社員も地元の人間はかなり多くいました。当時、私は福島第二で仕事していたわけですが、700 人の人間がいてその 8 割ぐらいが地元の人でした。そのうちの 24 人は津波で家を流されて、身内を失った人間が 8 人いました。でも、避難所に行くとやはり、「東電だろ」っていうことで、“加害者”の扱いなんですね。実際には被害者であっても、作業服を洗濯しても外に干せないとか、色々なことが当時はありました。

いまはそんなことはないと思いますが、そういう中でかなり東電社員ということでみんなが非常に苦労しながら、事故収束の作業と一緒に頑張ってくれたと思っています。私などは家族は東京にいたので、「早く地元に戻って来ていただくために頑張ります」と大きな声で言ってたんですけど、地元の私の部下たちは帰って来てもらったときにどうやって隣近所の人と対応すればいいんだろうなって、かなり悩みながら仕事をしていて、最近になっていろんな方から聞きました。

まあそういった中で、お話があつたように劣悪な環境の中で作業させたくないとか、東京電力の人間ももう少ししっかりと周りから見守ってあげたいというようなお気持ちから、作業員を守るといふ言葉で言っているんだと思うんです。まさにそういうところをですね、福島原発行動隊の方々にも参加していただくのがいちばんありがたいなと思いながら聞いてました。

あと、吉岡先生が仰ったように、東電だけでできないところもあると言いながら、東電でやるっていうのも半分思ってるって仰っていただいたのは、私にとっては非常に力強く聞こえました。そ

の他の所は無視してですね、ありがたいところだけしっかり受け止めて頑張っていきたいと思います。ありがとうございます。

吉田悦花

いえ、ほんとに、よろしくお願いいたします。
岸井さんは吉川さんのメッセージを受けて、どのようにお感じになりましたか。

岸井成格

そうですね、吉川さんのメッセージもそれから、名嘉さんが紹介された高校生のメッセージも重いですよね。メディアで働く人間の立場から言うとやっぱり紋切り型になりますけど、絶対に風化させちゃいけないっていうことと、現場で何が起きているかということのフォローをしっかりしていくことが、ものすごく大事なんじゃないかなって思いますね。

話はちょっと横にそれるように思うかもしれませんが、やっぱり戦争を経験した世代がどんどんいなくなって、いま、政治家でも現役で戦争を知っている人がなくなったことが、いろんな政策に大きな影響を与えてきてます。だからそういう点でいうと、先ほど言われたように、この原発事故は未経験の、ほんとに未知の領域に入ってきてるんですね。そして、大きな負の遺産でもあるんですよ。これをどうやって語り継ぎ、きちっと安全に確実に収束させ、廃炉にしていくかというのは、ほんとに正念場、いちばん大事なことだと思うんですよね。そこをしっかりやってもらう体制というのはどうやったら作れるのかってことじゃないですか。これは大きい課題だと思うんですね。

それから先ほど、元スイス大使の村田光平さんとお話してたんですけど、いろんな懸念の声っていうのは、世界中の外国人記者の方々から多く出ています。特にヨーロッパから見るとね、ものすごい。「総理はアンダーコントロールって言ったけどほ



んとか」と。「とてもじゃないけど信じられないよ」という声がね、依然として高いんですよ。大きいんですよ。だからこういうことに対してきちっと答えていくためにも国際的な協力というの、いろんな形で必要になっている、そういう時代になってるんじゃないかなって気がしますね。

もう少し申し上げますとね、先ほど植林の関係で申し上げましたが、気候変動による突風や竜巻だって怖いんですよ。それからもう一つはね、少子高齢化と同時に、日本ほど急激な人口減少時代に入っちゃったっていう国、ないんですよ。そういう中で社会や地域が壊れて行ってしまう。それがものすごく福島では追い打ちをかけるような形にならないかが心配です。悪い想像ですけどね、おそらくそういうことも更に進んじゃうんじゃないかなって懸念され、そういう点では心なきバッシングなどといったことは絶対さげなきやいけないと思っています。

それからやっぱり、被災された方たちはいろんな地域にいますけれど、福島はやっぱり飛び抜けてますよね。自殺も含めて関連死が飛び抜けて多いんですよ。だからそういう点のケアといったことも、しっかりしていかなきゃいけないんじゃないかって改めて思いました。

吉田悦花

はい、有り難うございます。そういう部分でも福島原発行動隊の皆さんが活躍できる場はあるのではないかなと思います、岡本さんはどのように受け止められましたか。

岡本達思

実は吉川さんという方とは、2年前に新宿の喫茶店で会ってるんです。そのときは、とても悲愴な顔をしてたような印象があるんです。若者が10人ぐらい集まり、そこに私も誰かからの紹介で参加し、福島第二原発で被災したときのお話をうかがいました。今日のお話を聞いて、良いスタートを切られたなって安心しました。できれば、福島第一原発の事故収束については同じ思いを持ってるわけですから、そういう若い方々とも福島原発行動隊はつながって行くべきなのかなっていう気持ちになりました。

あと、吉岡先生が言ってらしたことも関連しますが、福島原発行動隊は実は原発推進の人も原発反対の人もいるんですね。最初にご紹介したときに、思想信条を問わないというところで、事故収束のために自分たちは何ができるんだろうかという人たちが集まった組織なんです。そういう意味では、私も増田さんと目指している事は同じなんです。ですから、増田さんは増田さんで内部の方からの変革という形でですね、多重下請けの問題など体制変革であるとか、そういうような声を挙げていただき、お力を発揮していただければなあと思っています。私たちは私たちで、外からいろんな意味での働きかけをしていく。先ほど放射線の管理の問題をお話ししましたが、日本のいまの法令では個人の線量を国に届けるというシステムはないんですよ。

そもそも法律的に義務づけられてないんです。これについては日本学術会議の放射線の専門家たちも、やっぱり一元管理をしていかないといけないって、問題提起もされていますのでさっきお話をさせていただいたんですね。やっぱり事業管理者であるとか、労働基準監督署とか、そういうところの個別で管理はされていますが、例えば健康保険だとか運転免許証と同じようにデータで国が一元管理するというシステムにはなってない。私はいまだったらできると思うし、そのことは東電さんの方からもですね、国に具申していただきたいなと思っているんです。やっぱり日本にとって良いシステムを作ってもらいたいなと思ってます。そんなことを思いながら、その吉川さんのお話も聞かせてもらいました。

福島復興を
どうしていくか
きちんと考え
ていく必要がある

吉田悦花

はい。ということで、そろそろまとめのお時間にもなってきましたが、いままで様々なテーマで議論をしていただきましたが、お一人ずつご感想と、このシンポジウムの主催元でもある福島原発行動隊へ期待されることや、会場の皆さんに向けてのメッセージなどを、一言ずつお話しただけだと思います。もう一度、岡本さんに戻って、順々にお話しただけですか。

岡本達思

そんなに長い時間ではなかったんですけども、大勢の方に集まっていたいて、とてもうれしく思っております。福島原発行動隊は、とても多くの方にこの3年間、支えていただいたんですね。ただ私としては、支えていただいた皆さんのお気持ちに対して、私たちはあまりお応えできていないんじゃないかなっていう気持ちで恐縮しています。そういう意味ではもっと成果を上げていきたいなと、いろんな意味でそのような気持ちでおります。

吉岡先生は色々調べられている中で、現地についてはかなり悲観的な認識をされた中でお話されていますが、私も実は同じような認識を持っています。

去年ですか、福島の復興プロジェクトというか、そういう福島の人たちで復興ボランティアをされている方々が集まった会議に参加したことがあるんですが、彼らは福島の復興のことは語っても、福島第一原発事故については一切触れないんですね。老人介護の方とか、いろんな活動をされている方がいたんですが。私は朝から夕方まで皆さんの話を聞いていまして、オブザーバー的な立場で参加していたものですから、福島第一原発事故の収束作業のお話を少し最後に発言させてもらったんです。それに対して、皆さんとても辛そうな反応をされたんですね。それがいまの福島の現状なのかなと痛感しました。

ほんとは知っていて、そうした問題にも触れなくてはいけないのですが、とてつもないことがそこで起こっている中で、そこを触れないでいかに自分たちがどう生きていくべきかということを考えていらっしゃる方が、とても多くなっていることを感じました。だからそういうことも含めてですね、今後においてそういうことまで背負って福島原発行動隊としてやれること、若しくは私個人でやれることを、真剣に考えていかなければいけないなという思いを、今日は改めて強く感じました。どうもありがとうございました。

吉田悦花

はい、ありがとうございます。では名嘉さん、お願いいたします。

名嘉幸照

福島原発行動隊は、発足した当時から実にもったいない人材と思い続けてきました。これが3年経ってまだ彼らの目的が実現していない。先ほど言ったように廃炉にしても、長い年月かかりますし、廃炉は福島県だけではなく、日本全国です。私は廃炉の技術にしても、この福島第一原発の事故収束に対して日本の英知を結集すれば、日本にとって最高のビジネスチャンスをもたらすと考えています。

というのは、世界で550基以上ある原発も、いずれは廃炉になります。原発の輸出なんてとんでもない。それよりこれから廃炉の技術を確立して、日本の廃炉技術が世界に貢献していく。それを夢見て若い人も育てていきたい。そうしたことにも原発行動隊の皆さんに頑張ってもらうことを期待しています。

それから、東京電力さんには貸し借りのない情報公開と、同じように若い人の育成、このチャンスを活かして廃炉技術を政府と共々確立することをお願いし、今日皆さんの前で、共にやっという気持ちを確認したいと思います。

吉田悦花

それでは吉岡さん、お願いいたします。

吉岡 斉

はい、ありがとうございます。将来に対しては悲観的にならざるを得ないわけで、福島県やその周辺地域では特にひどいんだけれども、しかしこれは日本全体の縮図みたいなものでもりますよね。これから人口が急速に減っていったり、生産力のある64歳までの人口がもっと減っていったりとか、あるいは製造業が少しずつシェアを落としていくとか、日本の経済や生活環境というのはきっと劣化していきます。そう簡単に趨勢が変わるものではない。

で、そういう時代においても生活がまあまあの、持続可能っていう言葉はあんまり使ってもしょうがないんだけど、社会的連帯が維持されるような社会が作られていわけです。私たちはいないかもしれないけれども、そういう社会が維持できて、未来世代がいずれシニアになったときにそういう

社会がちゃんと機能するような状態が望ましいと思います。

それをどうやって実現するかという方向へ向けて考えていかなければならない。ですから、差別やいじめとかそんなのがあったんじゃ、かろうじて社会的連帯が保証されるような、物質的には厳しい状態になっていくと思うんですけども、それでも社会的連帯を維持するにはどうしたらいいか、それを考えると福島というのはとても重要な、日本あるいは世界のモデルを示す、あるいは日本や世界の将来の縮図が見えてしまうという、そういう恐ろしいところでもあるので、なんとかしなきゃならないと。

私も原発とかその廃棄物とかの大きなレンジで見ると、あと寿命はわずかですのでなんとか少しでも貢献はしたい。みんなそうですけれども、えりのあさんだけは違うかもしれない。

そして、人材教育がやっぱり必要だと思います。私も教育者でもあるわけですけども、廃炉カンパニーというのはやっぱり一つの良いモデルだと思います。他のことは抜きにしてですけど。

何が良いのかというと、うまく後始末をするということがものを作るより上位の価値にあるということ。これがこれからの世の中で普通になっていけば良いと思っています。私より 30 歳くらい上のおじいさんで、廃棄物政策の技術の研究者が何度も何度も言ってましたけども、これまでの技術体系、保険でも工学でも、作るのがえらくて、後始末はいちばん地位が低いというような価値観だったのを、逆転しなきゃ未来社会は持たない。まさにそういう価値観、廃棄物関係こそイノベーションの方向だという発想に立って、若い人たちに現場も見せなきゃいけないし、教えていく。共に語っていくという必要があると思います。

吉田悦花

はい、ありがとうございます。では、増田さんお願いします。

増田尚宏

これから 40 年 50 年、その福島第一の現場が、収束のために続いていく場所になります。汚染水の問題が片付いた後はですね、世界中が注目する

研究開発の場になると思っています。世界中の人たちが未経験ですからいろんな方が注目して、いろんな方が福島第一のまわりに集まっていろんな活動をされることになると思います。なんとか早くですね、世界中の方が結集して活気のある福島第一に見えるようになるように、私もじっくりがんばって行きたいと思っています。いままで私も原子力業界の中では色々お話をさせていただく機会もありましたが、こういった形で普通の原子力業界以外の方とお話するのは初めてでした。社内では私がこういったところに出ることを心配してくれる人もいたんですが、「まあまあ、行ってみようじゃないですか」って来たんですね。ほんとに皆さんに福島第一の情報をご説明できたのはありがたかったと思います。こういった機会を与えていただいてほんとにありがとうございました。

ただ先ほど岸井さんから何回も「隠してる」って言われたんですけども、私は隠してるつもりはさらさらないんですよ。何が「隠してる」といった印象につながっているのか、どういった情報を「お前ら出さないから隠してると思われるんだよ」とか、「何でこういうところを言わないんだ」とか、お聞きしながらぜひとも今度もう一回そういう場所をぜひいただきたいですね。ほんとに隠してるほどの知恵は全然ないので、全部、さらけ出しながらやっています。

ただ、さらけ出してる中でも、鈍くささも混ざっていますので、ちょっと「なんだよ」ってところもあるかもしれません。でも、同じ人間がやることですので、そこは寛大に見ていただければと思うんですけども。いずれにしろ、そういった方向で今後もチャンスをいただきながらやっていければありがたいと思います。

もう一つだけ、福島原発行動隊の皆さんの思いつてのは、ほんとに敬意を表します。いろんな形の思いを皆さんが抱いていただいて、我々の仕事を応援していただいているわけですが、先ほどの吉川さんのメッセージではありませんが、やっぱり私はぜひ皆さんにもそうしたことを考えていただければと思います。今日、私が何度も言わせていただいたことは、多分吉川さんのメッセージと同じなんじゃないかなと思ひまして。ぜひいろんな形で我々をバックアップ、あるいは作業をして

いる人をバックアップするための知恵をいただければと思います。ほんとに今日はありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

吉田悦花

増田さん、ありがとうございます。それでは岸井さんお願いします。

岸井成格

一切隠し事をしていないってことを、今日は増田さんからうかがいましたが、信じて良いのでしょうか？

私もね、全然違う立場で昨日あたりからなんかいろんなところから電話がかかってきましてね、「明日気をつけた方がいいよ」とか言われました。何に気をつけるんだか、「いまの時代はすぐツイッターで写真をぼいっと載せられるから問題発言だけはしないように」というご親切な方もいるもんだなと思いつつ、今日来たんですけども。

さっきの吉川さんのメッセージ聞いてて、これはと思ったのはやっぱり身近なところで自分一人ひとりができることから手をつけてやるってことですよね。それによって種を蒔いて、そして皆さんから水をかけてもらう。これって、植林の基本でもあるわけですよね。それを聞きながら、「そういうものだよねあ」と思いました。そういう意味で福島原発行動隊っていうのはほんとに、種を蒔いて水もかけてという、これから益々活動の意味っていうのは大きくなってくるんじゃないかなって期待をしております。

それと今日お話ししていて改めて感じたのは、私自身も言いましたけどやっぱり、時代の変化です。歴史認識って別のことでよく使われますけども、いまの時代、これからどういう時代になって行くのかってことをきちっと押さえながら、対応していくことがものすごく大事な時代になってくるんだなあっていうことを改めて感じました。

それからもう一点、後継あるいは若い世代、子どもたちにどうやって継承していくのがいいか、参考になればと思ってお話しさせてください。私の植林の活動でいちばん「ああこれがそうだったのかなあ」と思うのは絵本でした。私のNPOでは

『猿と人と森』という絵本を作りましたが、石川啄木の『林中の譚』という本で、人間と猿が文明論争するっていう話があるのですが、それを絵本にしたんです。啄木ってすごい天才だなあと改めて思うんですけど。

そしたらその絵本をきっかけに、いろんな学校や保育園の方たちとか、最近では外国までそれが伝わってですね、実際に現場に来られてる。こないだは、これ、言っていることかわかりませんが、天皇皇后両陛下が足尾に来られたんですね。植林の現場までは来られませんでしたけど。そのときにお見せしたら、やっぱり皇后陛下が絵本を目にされていたということを聞いてます。

ですからそうやって絵本を通じてでも、親子教室で使ってたんですけども、いろんな形でやっぱりこう、次の世代に伝えて行かなきゃいけない。非常に有力なツールなんですね、絵本というのは。それはもう親子でいろいろ楽しめますね。そういう点での利点というのは非常に大きいんで、いろんな活動をするときに、今後、使われたらいいかなと。いい絵本を作られたらいいかなというように思いました。これ一つの参考までにの話です。ありがとうございました。

吉田悦花

ありがとうございました。では、えりのあさん、どうぞ。

えりのあ

先ほど吉岡先生が、あと命がわずかっていう話があったんですけど、ほんとに若いとか年とすると関係なくて、人の命って今日元気でも明日どうなるかっていうのもわからないので、その瞬間瞬間を大事にしたいなと私は思ってます。だからこそ自分で、いま、シンガーソングライターとして何ができるのかっていうことで、社会福祉士という資格も活かしながら心のケアということで、被災地に行って足を運んでいます。仕事は仕事として、歌の方の仕事はしてますけども、別にボランティア活動もできる範囲でやっていければなあと思ってます。

実際に現地に行けない方もたくさんいると思うんですけども、行けなくてもその土地にいて、

東京にいてとか、栃木にいてとか、そこにいてもできることって、小さなことでもあると思うんですね。その辺りで皆さんがもっと意識を持って、毎日を過ごして行かなきゃいけないんじゃないかなあって私自身は思ってます。

私の本業は「シンガーソングライター」ですけども、今回のように歌をうたってないときは、喋ると舌っ足らずで「何だこの人は」って思われちゃうことが多いんですけども、皆さんにぜひ今日家に帰ってからでもいいので、インターネットで「えりのあ」と検索していただいて、YouTubeとかで被災地に行って歌ってるシーンがあるので歌声も聞いて欲しいなと思います。今度もし機会があったときには、生歌で歌を歌いたいなあとしますのでよろしくお願いします。そういうわけで、皆さんと今日お会いできたことが私もいちばん嬉しいです。

自分自身は、色々な人脈の中で動いていますけども、その一つに「全国歌麿の会」って“トラック野郎”という映画でおなじみのアートトラック協会の皆さんと、一緒に炊き出し支援とかもやってきました。最初は震災の後、自分の車に詰めるだけ無洗米のお米やとちおとめとかを持って、避難所にも行けない集落のところに差し入れていたんです。でも実際、自分一人ですることって、限界があるんですね。いろんな人と手を取り合ってやるとやっぱり力が倍増して、一日に千食ほど炊き出しができたりするので、それぞれの分野で活動する皆さんとご一緒するようにしています。今日も全然畑違いの先生たちとこの場でお話しさせていただいたことは、自分にとっても良い経験になりましたし、パネリストという立場も初めてだったので、皆さんにはご迷惑おかけしたかと思うんですけども有り難かったです。

私は東北地方で「えりのあカフェ」という企画をしたり、イベントなんかをしながら交流会をつくってるんですね。来年1月の第二日曜日に福島県双葉町でだるま市があるんですけども、そこに双葉町の人みんな集まるので私も歌もうたいます。いろんな形で交流会を定期的で開催しておりますが、地元の人脈だけで動くことも必要ですが、ときにはこういう専門家の方たちに来てもらって貴重なお話をしてもらったりとかすると住民も安

心すると思います。「いまテレビではこんなこと言ってるけど、ほんととはこういうことなんだな」とか、そういうことも知ると、生きてる中で何か頑張ろうっていう気になるよねって。

「仮設住宅ももう3月で出なきゃいけない、どうすればいいんだろう、これから先」って思ってる友達とかも多いんです。だけど「この先、こういう住宅があるんだよ」とか、「こういうところに住めるんだ」とか、やっぱり皆さんで情報交換することってというのはすごく必要だなあって感じます。皆さんにもそういう意味で、シニアっていう限定だけじゃなくて、もっと広いテーマで協力していただきたいなと思います。ほんとに今日はありがとうございました。

吉田悦花

はい、ぴったり、お時間が来ましたので、もう私からは何も言うことはありませんが、えりのあさんが素晴らしく、ここにいる人たちみんなファンになっちゃったという感じなので、すぐコンサートに行きますよって気持ちになりました。それはともかくですが、今日のシンポジウム、ほんとに素晴らしいディスカッションができたのではないかなと、私も勉強させていただきました。どうもありがとうございました。

たくさんの皆さんにお越しいただいたことと、それから準備にかけては、半年余り、スタッフの皆さんが打ち合わせに打ち合わせを重ねて、ここまで練り上げて下さったとうかがっております。ここに登壇されている方たちを始め、たくさんのスタッフ、参加者の皆さんが一丸となってこの場を作り上げて下さったのだなあとと思って、たいへん感謝しております、ありがとうございました。また今後、第2回ができるとよいなあと考えております。

青田いずみ

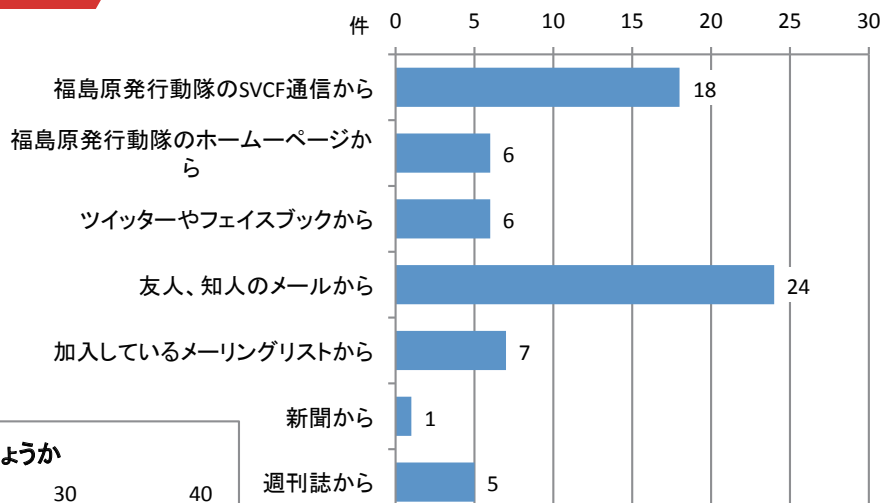
そうですね。第2回のシンポジウムを皆様にご紹介できる日が来ることを願ひまして、終わりにしたいと思います。改めて、皆様の暖かい拍手でパネリストの皆様をお送りください。それでは、長時間ではございますが、本日、本当にありがとうございました。

付録

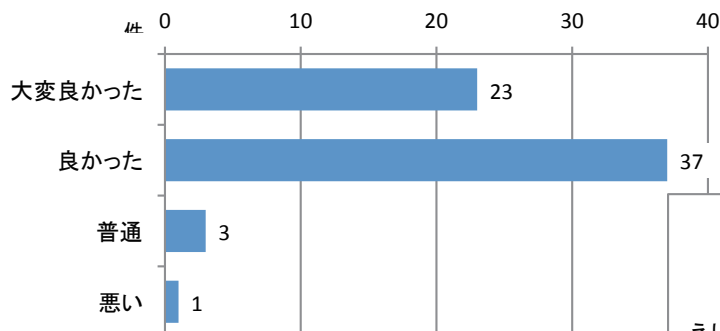
会場

アンケート

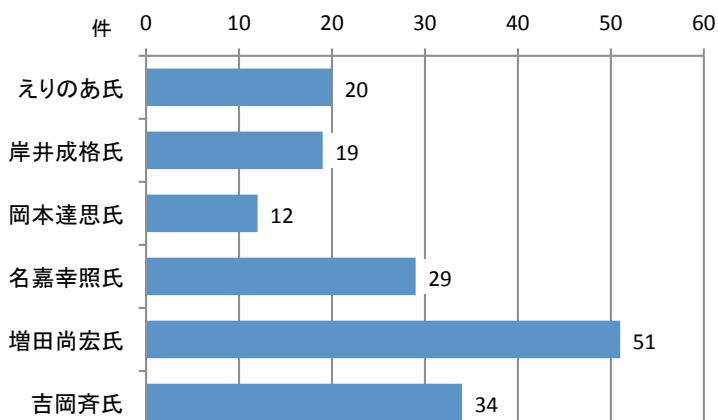
このシンポジウムをどこでお知りになりましたか



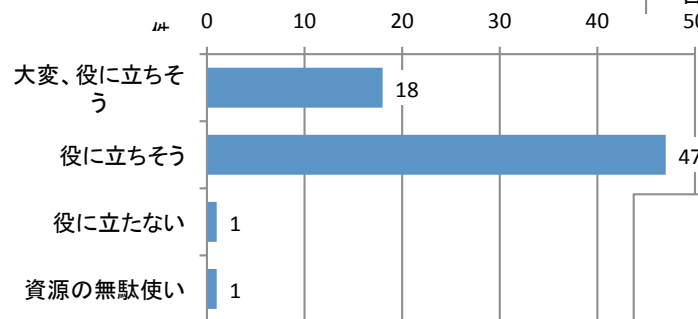
本日の内容はいかがでしたでしょうか



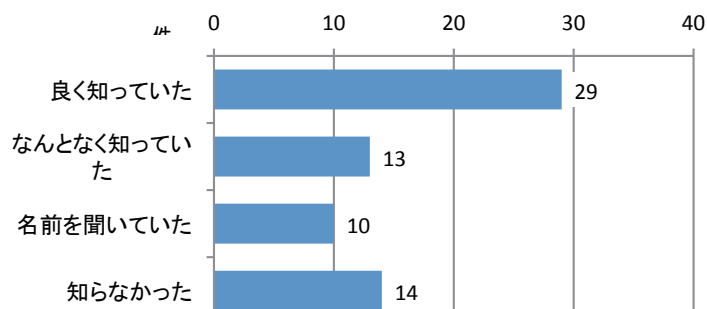
本日のシンポジウムで印象に残ったパネリスト



配布資料はいかがでしたでしょうか



公益社団法人福島原発行動隊について



会場 アンケート 感想

- 立場の違うパネリストの面々が、話を出来たのが非常に良かったと思います。私の印象は、行動隊の提案（希望）と、東電（廃炉 Co.）側のニーズが合致していないということです。東電は現場の仕事は、請負会社が責任を持ってやるべき事なので、東電はその前の段階（企画・計画等）で忙しいのだと思い込んでいるようです。（埼玉県在住）
- 増田さん持参資料を HP にアップして下さい。当事者の直接発言を生で聞かせて頂いたことを感謝します。（千葉県在住）
- えりのあさんの映像でも良かったから歌を聴きたかった。検索してみます。全体的にスライドなどの映像を使って欲しかった。福一の現状について、もう少し踏み込んで頂きたい、若干歯がゆさを感じました。参加者の中に意外と若い方が居たのが良かった。学割半額とかにすれば、もっと来たかも。（東京都在住）
- プロジェクターがあれば、もっと良かったと思いました。また、シンポジウム後の交流会なども今後あっても、と思いました。（東京都在住）
- 司会者の吉田さんが良かった。（神奈川県在住）
- せめて、質問回答コーナーを、もう少し増やして欲しかった。（山口県在住）
- すごい人選、プロジェクターが使えると、もっと良かった。質問を集めて少ししか答えないのは質問内容が適当でなかったから？気になった。（東京都在住）
- 安全な原発収束という目標を全員が共有していることが感じられた。（住所未記入）

会場および Webからの 質問

シンポジウム当日は、会場においてパネリストへの質問がある場合には、用紙に記入をしてお出しいただくようお願いをいたしました。さらに、Webにおいてシンポジウムの参加申し込みを受け付けた際、パネリストへの質問も記入していただきました。シンポジウム当日は、時間の関係もあり、個々の質問にお答えいただくことはできませんでしたが、シンポジウムにご参加いただいた方々がどのような事柄に関心をお持ちであるかを示す資料の一つとして、本報告書に掲載させていただきます。

なお、プライバシーの関係もあり、質問者のお名前は割愛させていただきます。

会場 からの 質問

●質問の相手：岡本達思氏、吉岡斉氏 ●質問：水を用いない福島第一原発事故の収束法を添付（別紙として資料が添付されていたが省略）、汚染水削減と早期収束に役に立つと思いますが。

●質問の相手：岸井成格、吉岡斉氏 ●質問：・東京オリンピックは事故処理に政府が最大限の努力をしていないことの傍証と見られております。・原発事故は一カ国では解決できないことが示されました。・全ての政府に（1）事故処理に最大限の対応をすること、（2）人類の全力を動員するため国際協力の具体化を義務とすることを担保する新しい国際システムが必要ではありませんか。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：汚染水の中に水酸化セシウムがあれば、苛性ソーダより強い腐食性がありますが、その点は大丈夫ですか？

●質問の相手：吉岡斉氏 ●質問：日本では「原子力」発電所と呼びますが世界では「NPP」「核電所」とすべて「核・nuclear」です。このことをどの

ように理解し、対応したらよいでしょうか。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：福島を逃れて避難している人たちを支援しているのも「原発行動隊」の役割と考える。専門性のないまま、現地に入ることは止めた方がいい。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：福島で子供の甲状腺ガンが90人にたつたと聞いていますが医療に行っても、放射能との因果関係はないので補償できないと、母親達が困っている現状を東電の増田さんはどう考えられますか・・・？

●質問の相手：岸井成格氏、増田尚宏氏 ●質問：F2もかなり危ない状況であったことを初めて知った。これが補導されていないのは何故なのか。どの点がもっとも危険だったのかについて知りたい。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：汚染水の処理について2点教えて下さい。1. 今、汚染水の処理が進んでいると思いますが、現在では何トンの汚染水がたまっていて、何トンの処理が終わっているのですか？ 2. 処理された水の放射能濃度についてですが、これまで原子力発電所から出る低レベルの処理された水は、日本中、世界中のその発電所からも、海、川に放出されている訳ですが、今、やっている処理作業で、処理された水は、この国によって定められた放出基準を下回っているのですか？

●質問の相手：名嘉幸照氏、増田尚宏氏、吉岡斉氏 ●質問：浪江町など、大熊、双葉の原発施設のないう町、村について放射線量が多いにもかかわらず、形だけの除染をして解除して帰町村させようとしています。年間放射量の上限を勝手にあげておいて安全という国の方針に疑問です。どうでしょうか？ロボットや最新科学で何かできないでしょうか？☆老い先短い？シニアの方の熱い活動に感動しました。シニアが日本人の1/6→1/4となる今、未来の為動くならば本当に素晴らしいと思います。☆首都圏の電力は自分で作ってもらえば、関心が高くなります。東京が一番電気を使っている

ので、是非、東京でも作ってほしいです！ どうすればよい？ ☆右も左もなく、日本の安全、未来の為、行動することが大切。その為には、関心を持たせることが第一歩だと思う。若者にもっと関心を持ってもらうことが必要ではないか？ <行動隊>作業内容を知り訓練をしていく必要がある。浪江町出身の者です。双葉町には妹家族、親戚、友人大熊町には親戚、友人周辺に友人多くの知り合いがおります。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：私は10年ほど前、柏崎原発と浜岡原発の二つを見学し、それぞれ1時間半の安全講話を聞きました。2011年以前、天災時のどんな対応策はたてられていたのか、訓練はなされていたのか、お話しいただきたいと思います。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：現在のフクイチでの冷やす・閉じ込めるの支障となっているのは、今年のフクイチトラブル報告で最も多い配管や様々な弁からの漏水で、老朽化と海水による金属の腐蝕によるものが原因と思われます。今後も劣化が進んでいくだろうおびただしい配管類の保守は、現実のオペレーションの中で、本当に可能なのでしょうか？ ○冷やしつつ閉じ込めていくという計画自体に無理はないのでしょうか？

●質問：SVCFに外注はありえないとのことですが、知識のない若者が複数作業しているのは（TVで）なぜですか？意味がありますか？ベテラン作業員は使えないと言いましたが？1日の給料がピンハネされては作業員は集められないでしょう。もっと本人に行き渡るようにできないのですか？健康診断もまともにできない人もいます。どうなっているのですか？

●質問の相手：岸井成格氏 ●質問：原発の収束・廃炉に従事する作業員の安全の為に放射能を減らす（半減期を早める）方法の開発はされないのでしょうか？今年7月に東大で行われた、日本アイソトープ協会の研究発表会で半減期12億年のカリウム40Kが6ヶ月の試験で約20%の減衰率となったことが発表されています。

●質問の相手：吉田悦花氏 ●質問：雑学大学の理事長と放射能問題（→廃炉）とのかかわりについて、原発の問題は物理学、科学、経済学、地震学、土木工学etc. に関係する”学際的”な問題なので、良い意味での雑学というのかな？

●質問の相手：岡本達思氏 ●質問：◎行動隊が「当面参加」できなかった理由、政府等の断り文句は？政府等の「反応なし」「無視された」ということでしょうか？◎「国家プロジェクト」って本当に責任をもって廃炉に取り組めるのでしょうか？責任者は誰？役人・学者・有識者 東電は加害者だから責任を持ってやらざるを得ないのでは？→国は金を出すことはあっても遂行主体にはなりえないのでは？

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：第一原発と第二原発と、被災状況等、何が同じで何が違ったのか？

●質問の相手：吉岡斉氏 ●質問：福島原発は汚染水たれながし状態です。しかも止めるメドは全くたっていません。凍土壁は施行前から無効であることが指摘され、その通りになりました。粘土を詰め込めば最適との意見があるのに何故利用しないのですか。コンクリートを流し込む案があるそうですが、この方法は無効の結果が出た時に手直しが不可能となります。当事者でなく、脇から見た専門家としてご意見を述べて下さい。

●質問：1. SVCF 理事長の「年寄り是一回こっきり高線量箇所働く」という発想は、Fukushimaに限らず、廃炉の現場に適用できるものです。他の原発の廃炉に適用する考えはありますか？
2. “隔離管理”は文系の私の直感に合います。ところで、「管理」されるF1の場所近くに、原発神社（祭神は“まがつひの神”）を創建し、技術者が自分の仕事を反省し、自然の神々にいのる場にすべきだと考えますが、いかがでしょうか。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：責任問題などもあるので、行動隊には若い人材にエールを送っ

て欲しいとのことでしたが、知識を次の世代に伝えて行くために、研修施設等を国策でつくり、そこで教えていく人材として活用はできないでしょうか。

●質問の相手：岸井成格氏 ●質問：まわりの関心がうすれてきています（目をむけたくないのかも）。みんなに自分事化してもらうために・収束・廃炉ちゃんとできないと日本はどうなってしまうのか（専門家の想像でも）報道してもいいのではないか。・学校の教育で原発で起きたこと、今後どうする予定なのかなど、子供達に伝えているのかご存じでしたら教えて下さい。
私は40才ですが、小中学校で原発の素晴らしさを教えられていました。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：現場作業員が何段階もの下請け構造の中で本来受けられる危険手当さえもらえないと言われます。もっと直接的に報酬を支払える構造に出来ないのですか。作業員への報酬支払いの仕組みをよりシンプルにできないものか？少なくとも元請けから直接支払う仕組みに。

●質問の相手：吉岡斉氏 ●質問：東電の当事者責任は当然として、国の役割の中で「原子力損害賠償・廃炉機構」積極的活用と責任についてどう思いますか。そこでの「SVCF」の活用も含め。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：☆（解体）廃炉を考えるより、汚染水対策をもっと深刻に考えるべきでは？ ALPSでもトリチウムは除去できない、線量が低くても未知影響が考えられ太平洋を汚染し続けている。海洋法違反で訴求されるリスクも。☆吉岡さん指摘のように解体廃炉はあきらめるべきでは？ 大量被曝するし、高レベル廃棄物の処分のメドは全く立っていないので。

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：7000名もの方が戦争状態の中で働いておられるとのことですが、一般の人が見に入れる日はいつごろになるのでしょうか。

●質問：単位当たりの発電コストの生涯関連コストを含めいかがか。現在の作業は何を目標にしているか。廃炉か事故の始末なのかm原子力全体の廃炉なのか。

●質問の相手：岸井成格氏 ●質問：廃炉は別組織がよろしい。1：廃炉は不可能では？ 2：平素から汚染水をタレ流しであるのか。参加者の意見を重点にしましょう。

●質問：2020の東京オリンピックの開催直前に周辺の国から汚染水の収束がついてないのに（海に流し放し）開催についてのクレームがいついたらどうするの？

●質問の相手：パネラー全員 ●質問：1、シニアの活用：行政・メーカー・電力等の各界の幹部からお手本を示して下さい。2、福島原発の放射能汚染水漏出対策、批判的学者も参加させて、漏出を減少。3、経済的支出の3割は国費もやむなし（電気料金を値上げされては国費も同様）

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：増田さんはその立場上、原発事故のA：「収束工程の困難さ」、B：「作業現場の苛酷さ」をだれよりも理解されているだろう。それにもかかわらず、東電全体はなぜ、(1) 原発事故の可能性がもはや否定できない現在、Aを受けては脱原発が合理的判断のはずだが、一時的な再稼働ならいざしらず、原発の積極的維持・新規増設さえしようとするのか？（※こちらは増田さんに聞いても仕方がないことかもしれませんが…）(2) Bにより劣悪な労働環境におかれた作業員を直接労務管理することで、賃金面・健康面で適正に支援することができないのか？

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：・話しにくい場でしたが、正直な意見をうかがうことができました。ありがとうございます。大勢の部下の方々、協力会社の皆さんとともに、増田さんを応援しています。・情報開示はたいへんです。正直な人間には負担が大きいはずですが。それでも、どんどん、もっと開示していきましょう。

●質問：原レベル放射性廃棄物の処理について日本
学術会議が近く報告書を出すとのことですが、東
電はどのような方針でしょうか。

●質問の相手：岸井成格氏 ●質問：大手メディア
の立場から福島原発の問題、課題を将来に向けて
どのように取り組んでいかれるでしょうか？

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：1：安倍首相
が東京オリンピック誘致の際のプレゼンテーショ
ンの時に、周辺2 km以内はアンダーコントロール
されているとスピーチされました。現状として
本当にアンダーコントロールされているのか知ら
せて欲しい。2：チェルノブイリ事故と福島事故
との収束・廃炉作業の違いは何でしょうか。（困
難さ）

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：・収束作業
の現場労働者の確保について、3年間の見通しを
もって云々の説明がありましたが、安心して働く
ためには3年では短いのではないかと。・多重雇用
関係を改善できないのか？下請け、派遣など不安
定雇用を改善すべきでないか

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：作業員の被
曝は現在完全にコントロール出来ているとお話
ですが、度々メディアにのぼる作業員の告発、例
えば、線量計の管理のずさんさなどはどのようにな
っているのですか？ 多重下請けの人の話なら
ば、その構造はどうしたらなくなっていくとお考
えですか？

●質問の相手：名嘉幸照氏、増田尚宏氏 ●質問：
ゼネコン、メーカーを頂点とする下請け体制はピ
ンハネ体制と理解しています。この体制をなんと
かできないのか？ せめて7次を3次程度に。

●質問の相手：増田尚宏氏、吉岡斉氏 ●質問：そ
もそも原発に頼らないとやはりエネルギー面はま
かなえないのか！？ 他の代替エネルギーとして
の案は？ 軍事的な面を考えても必要性はあるの
か？

●質問の相手：増田尚宏氏、名嘉幸照氏 ●質問：・
作業員の福島県民率が出たが、通いで来れる人・
県内他地域の人の割合。・7000人のうち、どのセ
クションにどのくらいの人数なのか？ ・計画上
の被曝量と年度の関係

●質問の相手：岸井成格氏 ●質問：ロシアの非常
事態省みたいな者の設立の提案とか動きはあるの
か？

●質問の相手：増田尚宏氏 ●質問：収束・廃炉ま
で残り40年。収束後の未来は？ 汚染水を貯め
続ける 汚染水はその後どう処理するのか？ 東
電としては、収束・廃炉10年～ 地元住民が戻
ることを希望しているのか？ 燃料取り出し、汚
染水の問題が解決したとして、福島県の双葉地区
のインフラは元通りになり、人々は安心して住め
ることを希望しているのか？ 福島の現場の現状
は日を追うごとに関心が薄れている。ACやNPO、
関心を持ち続けるようPR発信し続けることで継
続的な雇用、人材確保が出来るのでは？



●質問：1 喫緊の課題である 汚染水問題、トレ
ンチ内の高濃度汚染水封じ込みそして引き抜き、
先の見えない凍土壁問題、トラブル続きで安定し
ないALPS処理施設、増え続ける汚染水をためる
急造した漏れの心配される組み立て式タンクの溶
接タンクへに切り替え、4号機で行われている燃
料棒取り出し作業の完了後の1～3号機の工程な
ど収束もしていない現状の先の見えぬ段階で川内
原発で民意を無視した再稼働の方針についてどう
考えるか。地元了解とは30 km圏だけではないは
ずです。

2 無駄な金をかけてもんじゅをはじめプルサー
マル計画を前提に凍結を見直し大間原発を始め3
か所で新增設を進めている。再生エネルギーこそ
先ではないか。融通できない送電網を理由に買取

を中断する動きをどう見るか。消費税が上がる議論の中電気代を少しでも下げる施策が必要では？

●質問：岸井成格様 サンデーモーニングの切れ味鋭いコメントやnews23のご活躍を拝見しています。さて原発報道をめぐるマスコミの在り方については、失望のほうが多いのが現実です。例えば「被曝影響の歴史的科学的経緯」など（与えられていない）情報を与えて聴取者が判断するシリーズものなどは考えられませんか。日々のニュースでは日々の「規制」との確執で限界を感じます。日々のニュースもさることながら体系的知識の集積の編集・開示がマスコミの一つの役割だと思えますがどう考えられますか。

吉岡斉様 原子力市民委員会の座長であった舩橋晴俊さんが急遽されました。私たち市民から見ても沈着にして俊英なる、頼りがいのあるまさに市民学者でしたが、近くで共同作業をさせての舩橋さんの人となりをご紹介いただければ幸いです。

●質問：吉岡先生 「民間福島原発事故収束委員会」の代表をしております。私は2011年6月に鉛収束法を発表しております。週刊朝日にも掲載されました。炉内に鉛を投入するとどのような反応が起こるかを解析し、格納容器全体がラジエーターになることを推定しています。この会では収束するための何か具体的な提案があるのでしょうか？10分ほどの発表の機会を与えていただきますと大変うれしく存じます。この会は本当に収束をさせるおつもりが有るのでしょうか？

●質問：死ぬおそれのある作業に従事する特別作業班（高齢の技術者・技能者で編成）を常置することの必要性はありやなしや。

●質問：全パネリストに対して。1. 原子力発電において放射性廃棄物の最終処理が安全にできないのに原子力発電を商品と販売することは経済学の本質論から供されないのではないかと？

2. 放射性廃棄物を堅固な容器に置いて地球の沈み込みプレートに載せれば処理可能ではないのか？

3. 放射性廃棄物をロケットにのせて太陽にぶち

込む方法は考えられないか？

●質問：全パネリストに対して。世界はすべて「nuclear」と云っているのに、日本だけは「atomic」と云っている。交通信号に例えると、世界の人には「黄・注意」と見えているのに、日本人は「青・安全」と見ているのと類似ではないか。この「原核反転」が「福島爆発」の「基本認識的素因」と思うが、如何か？

●質問：全パネリストへ。水を使わない事故収束法を考えています。この方法は汚染水をなくすことも可能であり、取り出す必要もないので 早く安くできると思います。崩壊熱は最大でも200KWとされています。水を抜いた時に臨界に達することはないと思いますが、ご意見いただければ幸いです

●質問：全パネリストへ。欠陥車が運転手か、事故責任を事業者に責任集中させ製造物責任はなぜ問われないか。国策として進めた国の責任もふくめなぜ責任が問われないか。再稼働・輸出…等が云々されるがそれ以前の問題ではないか。原子炉の過酷事故では想定外はあり得ないはず。

名嘉幸照さんへ。GEでは今回の事故以前から欠陥の見つかったMk1をリプレースするよう東電に助言し要求したと言うが、それは事実か、事実ならどうして放置したのか。車の欠陥が見つかりリコールして安全第一が鉄則ではないだろうか、特に製造物の運転では。

●質問：全員のパネリストへ。1、収束・廃炉の時期はそれぞれいつごろですか？ 2、収束・廃炉の前提となる汚染水対策がお手上げ状態、妙案はありますか？ 3、未使用・使用済み問わず、核燃料の運搬・管理上の手違いから爆発事故が発生しないように対策を適切にたてていますか？

●質問：増田尚宏氏 福一1、2号基は、地震時に壊れたという方が多い。いい加減に決着をつけてください。真実を語っていただけませんか、お願いします。

●質問：増田さまへ。福島は被災者のみなさんにとって最大の関心事は、第一原発構内で取り組まれている廃炉作業です。広く現状をお伝えできるよう、私たちフリーランスにも十分な取材の機会を与えていただきたく思います。現場公開の拡充について、展望をお聞かせ下さい。

●質問：増田氏、名嘉氏、吉岡氏への質問。

*除染について、「止める・冷やす・閉じ込める」のうち、かろうじて出来ているのは冷やすだけで、閉じ込められていない以上放射能は漏れ続けているわけで、汚染を防ぐ事はできず無意味だと思います。綺麗にならない住めない土地に、膨大な労力・時間を費やして貴重な作業員の命を脅かすキリのない除染を繰り返す事は無意味な上、大金を捨てているようなものだと思いますが違うのですか？　そもそもチェルノブイリでは、事故の6ヶ月後に石棺で”閉じ込めた”にもかかわらず「除染は無駄」と言われていますが？　半永久的に溜まり続ける汚染物・除染土の置き場が無くなるのは時間の問題だと思うので、除染をやめるだけでも大分違うと思います。野ざらしの汚染土の袋が劣化で破れ、雑草が生えている写真を見ました。これではそこに隔離した意味がありません。それでも除染を続ける意味がありますか？

*私たちに何ができるか〜について。今日本にある膨大な使用済み核燃料以外に、廃炉によって出るであろう膨大な核廃棄物も最終処分場に10万年（オバマ大統領は100万年保管が必要と言っている記事を読みました。）は保管が必要になるようですが、これで再稼働したらさらに使用済み核燃料が増えます。また、54基もの原発が日本を取り囲んでいるわけですが、いつどこで大災害に見舞われるか分からない状態にあります。また、大災害でなくとも、数十年稼働すれば劣化は進み、巨大施設のあらゆる所で点検が完全ではなかったりして、100%冷却が止まらないという保証はないと思います。そこで、再稼働をやめれば、①危険な核のゴミは、これ以上増えない、②もし、どこかの原発で冷却ができないような問題が起こったとしても、稼働中よりはまだ危険の度合いが低い事になるので、こういう事も次世代に対して私たちができる事だと思います。福一だけでも先が

見えず手一杯なのに、他の原発で何かあったら作業員は足りず、なす術がないと思うのです。どう思われますか？”

●質問：増田尚宏氏と吉岡齊氏に質問。廃炉に向けての施策の前に、事故の収束を行うことが絶対に必要です。然るに、事故収束の目処は全くたっていないと思わざるを得ません。事故収束のためには様々な項目がありますが、地下水の流入による汚染水の増加に対処することが最も緊急を要すると思います。ところで、今までの対策は完全に失敗でありました。冷凍土による地下水の流入防止は全く効果が見込めません。早急に他の方法を適用すべきです。私が聞いたところでは、凍土方式は失敗の可能性が大きく、粘土で地下遮水壁を作成するのが最も簡単で、修復も簡単とのことでした。なぜ、この方法を適用しなかったのでしょうか？ある情報によると、新しい方式でないと補助金がでないからと聞きました。そのような事実はあるのでしょうか？　ご高説を承りたいとぞんじます。

●質問：増田尚宏様　現場の実情が把握出来ない今どのような工程を計画されるのか構想をお話し下さい。また、各レベルの廃棄物の処理方法をお話し下さい。専用の技術開発研究施設が必要になるかと思われませんがご見解をお話し下さい。

●質問：増田先生へ：　廃炉できるのでしょうか。このまま石棺で葬るべきとも考えますが。特に3号機のMOXは困難ではないでしょうか。3号機の線量が高いのはMOXが原因でしょうか。

適切な先生へ：　汚染水問題はどうか解決できるでしょうか。崩壊熱が減っていれば冷却水は減らせますか？　トリチウムはβ線エネルギーが低くても生体へ影響が高いのではと考えてますが如何でしょう。

●質問：東京首都圏の人たちに電力を自力で作るようになるには、どのような働きかけが必要か？　地方に、危険な原発を背負わない意識をもってもらうには、どうしたらよいか。具体策を全パネリストにお聞きしたい。

●質問：辺野古・高江の基地建設問題について、どう思うのか、どうしているのか。

●質問：名嘉さん、増田さん、吉岡さんにお尋ねします。何を（例えば水冷）やらなければ何がどうなり、何人が死んだり動けなくなったりするかを示す事も重要ではないですか？現状のまま、石棺化したら、何人が死ぬのでしょうか？

●質問：諸外国、特に日本に近い中国、韓国は日本の原発問題への対応をどのように見ているのか、教えていただきたい（どなたでも結構です）。

映像のご紹介

シンポジウムの映像は下記で全部ご覧になれます。

前半

<http://youtu.be/6ddgBWeUWV0>



後半

<http://youtu.be/JMpF08cs90Q>



また、下記から福島原発行動隊の公開している動画が一覧できます。

<https://www.youtube.com/user/SVCFjp>



公益社団法人 **福島原発行動隊**
Skilled Veterans Corps for Fukushima



発行 2015 年 1 月 31 日

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 2-2-5
共同通信会館 2F 32 エコホールディングス（株）内
TEL 03-6441-2572 FAX 03-6441-2573

<http://svcf.jp/> svcf-admin@svcf.jp